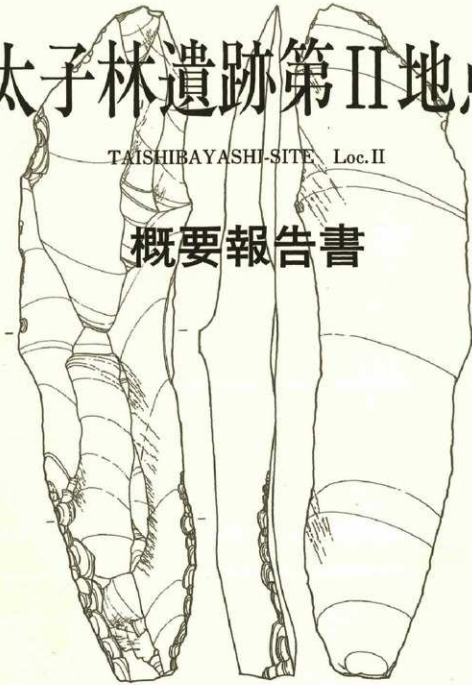


太子林遺跡第II地点

TAISHIBAYASHI-SITE Loc. II

概要報告書



1999. 3

長野県飯山市教育委員会

太子林遺跡第II地点

TAISHIBAYASHI-SITE Loc. II

概要報告書

1999. 3

長野県飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字瑞穂字太子林4430-6ほかに所在する太子林遺跡第Ⅱ地点の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、農業集落排水処理施設建設に伴い、飯山市（担当経済部下水道課）より依頼を受けた飯山市教育委員会が調査団を編成して実施した。
- 3 太子林遺跡第Ⅱ地点は太子林遺跡の範囲内であるが、遺跡の内容から新たに第Ⅱ地点として報告するのが適当と判断し、本稿では「太子林遺跡第Ⅱ地点」として報告するものである。
- 4 今回の調査によって検出された発見された遺構・遺物は、縄文時代前期の柱穴（今回未報告）と旧石器時代の石器群約1,800点である。
- 5 調査にかかる体制は以下のとおりである。

飯 山 市 長 小 山 邦 武

（経済部下水道課）

経 済 部 長 宮 沢 邦 彦

下 水 道 課 長 丸 山 忠 吉

農 村 集 落 排 水 係 長 小 沢 俊 之

（教育委員会）

教 育 長 岩 崎 彌（～平成10年12月25日）

清水 長雄（平成10年12月26日～）

教 育 次 長 井 出 澄 夫（～平成10年12月25日）

石 沢 雄 司（平成11年1月1日～）

生 涯 学 習 課 長 平 野 英 孝

同 社 会 教 育 係 長 山 室 茂 孝

同 係 主 査 伊 達 信 寿

同 係 主 査 望 月 静 雄

（発掘調査団）

副 長 高 橋 柱（飯山市文化財保護審議会長）

担 当 者 望 月 静 雄（飯山市教育委員会事務局職員）

調 査 員 田 村 晃 城（飯山市埋蔵文化財センター調査員）

” 常 盤 井 智 行（ ” ）

発掘作業参加者 高 橋 武・榎 中 高 見・岩 井 伸 夫・高 橋 喜 久 治・土 屋 久 榮・宮 本 鈴 子

岸 田 志 づ 子・林 竹 二 郎・蒲 原 澄 男・出 沢 永 作・関 口 清 治・万 場 義 秋

樋 口 栄・小 境 雅 彦・東 条 寅 雄・望 月 拓 郎

伊 達 信 寿・服 部 敏 夫・小 林 輝・桃 井 伊 都 子（飯山市教委）

整理作業参加者 小 林 正 子・小 林 裕 子・望 月 洋 子・小 林 美 里・藤 沢 和 枝

- 6 発掘調査から整理作業において、以下の方々・機関よりご指導・ご協力をいただいた。
記して厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)
永峯光一・中島庄一・田中清見・大竹憲昭・谷 和隆・広瀬昭弘・吉原佳市・堤 隆
中村由克・瑞穂地区農村集落排水組合(組合長小林洋之)・瑞穂公民館(館長小林国博)
関沢区(区长鷺野功)
- 7 本書は、高橋柱団長指導の下、主に望月静雄が遺物・藤沢和枝が図面を担当した。執筆は望月が行ったが、Ⅶの「飯山市太子林遺跡第Ⅱ地点の地形と地質」を早津賢二氏・小島正巳氏に玉稿をいただいた。
- 8 発掘調査にかかる図面・遺物等の資料はすべて飯山市埋蔵文化財センターにて保管している(電話0269-65-3993)。

凡 例

- 1 グリット別遺物分布図について
- 記号 ● 石刃・剝片 10g以上大 10g以下小
 △ 搔器・削器
 ■ 礫石器
 □ 石核
 ★ ナイフ形石器
- 石器番号 右上の番号 グリット別固体番号
 右下の番号 本書中の実測図番号
- 2 石器実測図は2/3で示したが、礫石器のみ1/2である。

目 次

I 太子林遺跡・太子林遺跡第II地点の概要	1
1 太子林遺跡	1
2 太子林遺跡第II地点	1
II 遺跡の位置とその環境	2
1 遺跡の地理的位置	2
2 周辺遺跡	2
1) 旧石器時代	2
2) 縄文時代	7
3) 弥生時代	7
4) 古墳時代	7
5) 古代・中世	9
III 発掘調査	10
1 調査の経緯	10
1) 調査に至るまでの経過	10
2) 調査経過	10
2 調査	13
1) グリットの設定と調査方法	13
2) 文化層	13
IV 遺物の出土状態	16
1 概 要	16
2 遺物の集合	16
3 概 評	17
V 遺 物	60
1 遺物の種類	60
2 遺物各節	60
1) ナイフ形石器	60
2) 搔 器	61
3) 削 器	61
4) 錐	61
5) 小剥離痕のある石刃・剥片、剥片	61
6) 石 核	62
7) 石製品	62
VI 飯山市太子林遺跡第II地点の地形と地質	74
1 はじめに	74
2 地 形	74
3 地 質	74
4 旧石器群の出土層準	75

挿図目次

- 図1 太子林遺跡第II地点の位置 (1:50,000)
 図2 飯山地方の旧石器時代遺跡分布図 (1:75,000)
 図3 周辺遺跡の分布図 (1:25,000)
 図4 周辺地形図 (1:5,000)
 図5 発掘区深度図 (1:200)
 図6 遺物分布図 (1:500)
 図7 層序 (G-11区北壁) (1:20)
 図8 遺物群分布図 (1:200)
 図9 1群遺物分布図 (1:80)
 図10 2・3・4群遺物分布図 (1:80)
 図11 5・7群遺物分布図 (1:80)
 図12 9群遺物分布図 (1:80)
 図13 1号碟群分布図 (1:30)
 図14 2号碟群分布図 (1:30)
 図15 F-14区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図16 F-15区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図17 G-11区遺物分布図 (1:40)
 図18 G-12区遺物分布図 (1:40)
 図19 G-14区遺物分布図 (1:40)
 図20 G-15区遺物分布図 (1:40)
 図21 H-11区遺物分布図 (1:40)
 図22 H-12区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図23 H-13区遺物分布図 (1:40)
 図24 H-14区遺物分布図 (1:40)
 図25 H-15区遺物分布図 (1:40)
 図26 I-11区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図27 I-12区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図28 I-13区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図29 I-14区遺物分布図 (1:40)
 図30 I-15区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図31 I-16区遺物分布図 (1:40)
 図32 J-11区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図33 J-12区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図34 J-13区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図35 J-14区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図36 J-15区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図37 J-16区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図38 K-11区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図39 K-12区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図40 K-13区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図41 K-14区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図42 K-15区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図43 K-16区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図44 L-11区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図45 L-12区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図46 L-13区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図47 L-14区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図48 L-15区遺物分布図 (1:40) (1:4)
 図49 L-16区遺物分布図 (1:40)
 図50 M-11区遺物分布図 (1:40)
 図51 遺物実測図(1) (2:3)
 図52 遺物実測図(2) (2:3)
 図53 遺物実測図(3) (2:3)
 図54 遺物実測図(4) (2:3)
 図55 遺物実測図(5) (2:3)
 図56 遺物実測図(6) (2:3)
 図57 遺物実測図(7) (2:3)
 図58 遺物実測図(8) (2:3)
 図59 遺物実測図(9) (2:3)
 図60 遺物実測図(10) (2:3)
 図61 遺物実測図(11) (1:2)
 図62 遺跡周辺の地形 (1:25,000)
 図63 遺跡付近の地質柱状図

写真図版目次

- | | | | |
|------|---------------------------------------|----|----------------------------------|
| PL 1 | 遺跡遠景（東方小菅地区より）
調査地区遠景（北方瑞穂グラウンドより） | 7 | 玉髄裂石核⑩出土状況
安山岩製石核（第5群）出土状況 |
| 2 | 調査地区近景（東方関沢バイパスより）
調査地区近景 | | 大形ナイフ形石器(1)出土状況
ナイフ形石器(6)出土状況 |
| 3 | 調査地区表土除去
地質調査（工事施工後） | | ナイフ形石器(2)出土状況
ナイフ形石器④出土状況 |
| 4 | 層序
作業風景（東より） | | ナイフ形石器(3)出土状況
ナイフ形石器⑥出土状況 |
| 5 | 第5群遺物出土状況
第4群遺物出土状況 | 8 | 出土旧石器(1)ナイフ形石器ほか |
| 6 | 平坦地（G・H・I）の調査状況
第1号礫群 | 9 | 出土旧石器(2)削器ほか |
| | | 10 | 出土旧石器(3)石刃・石核・ハンマー |

I 太子林遺跡・太子林遺跡第II地点の概要

1 太子林遺跡

太子林遺跡は、昭和55年に発掘調査が実施された(飯山市教委 1981)。これは、県道改良工事(関沢バイパス建設)に伴うもので、約2,000㎡の調査によって、ナイフ形石器・搔器・錐・局部磨製石斧などの旧石器石器群が検出された。特に、局部磨製石斧2点の発見は、長野県においては発掘時に確認された例としては初めてであり、当時全国的にも約20点の検出例を数えるに過ぎなかったため、その編年的な位置づけについても大いに注目されることとなった。

石器群の編年については、当時の全国的に基本となっていた「野川編年」にあわせて野川二期、南関東編年では局部磨製石斧の型式の類似からPhase II bに位置付けた。その後、地質学的見地から、広城火山灰のAT(始良Tn火山灰層)を指標とし、調査地区は二次堆積であったが、同時期ないしは直上であるとの見解を発表した(早津ほか 1981)。

また、調査区は地形的に遺跡の東北端にあたることから、縄文式土器が採集される地点を含め約1万平米を太子林遺跡の範囲として把握してきた。

2 太子林遺跡第II地点

今回調査を行った地点は太子林遺跡の南端にあたり、前回調査を行った地点と同一遺跡範囲として把握していたが、調査の結果堆積土層が異なること、前回調査地点から標高差30m、距離にして500m離れており、石器群の同一性が不明であること等を考慮して同一遺跡で異なる石器群は混乱を招くと考え、今回の報告にあたり「太子林遺跡第II地点」として報告するものである。

第II地点は、丘陵の南端の千曲川を眼下に望む場所にあり、農業集落排水事業により緊急発掘調査が行なわれることとなった。発掘期間は、平成10年8月17日から、同年11月6日まで行われた。発掘面積は約1,000㎡で、旧石器時代の石器約1,800点が出土した。

発見された遺物には、ナイフ形石器・搔器・錐などの製品のほか多くの剥片・石核などが発見されている。製品の種類としては、ナイフ形石器22点、搔器6点、削器4点、磨石4点などがある。

特にナイフ形石器は、大型の製品が多く数量的にも飯山市域では最多である。なお、太子林遺跡との石器群の類似性については、石刃技法であることに変わりはないが太子林遺跡第II地点出土石器群がより発達した石刃石器群と考えられること、玉髄を多用していることや局部磨製石斧が検出されなかったことなど、むしろ相違点が挙げられ、太子林→太子林第II地点の編年を考えている。

時間的都合により整理作業は完了していないが、今後接合作業等を通じて太子林遺跡第II地点の内容を明らかにしたいと考えている。

II 遺跡の位置とその環境

1 遺跡の地理的位置

太子林遺跡は、長野県飯山市大字瑞穂地区（発掘区は大字瑞穂字太子林4430-6）に所在する（図1）。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に最後に残す平らが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の峡谷地帯を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改めいわゆる津南段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地は、東西6km、南北15kmの紡錘形の小盆地である。盆地西縁は、黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.8m)等比較的低い関田山脈（東頸城丘陵）によって画されている。ここには越後へ通ずる幾つかの峠道が存在している。一方、東縁は毛無山(1640.98m)等三国山脈の支脈によって、また断層構造線に沿って急峻な山地で画されている。

平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は、飯山市街地北方より戸狩地区にいたる長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて常盤平・外様平が広がり、当地方最大の穀倉地帯となっている。東側は、その南半にかつての千曲川氾濫原である木島平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって、段丘・丘陵等の微高地が開析谷を隔てて連続的に連なるといふ複雑な地貌を呈している。そしてこれらの微高地には、幾多の遺跡が存在しており、太子林遺跡もこの微高地上に存在している。

太子林遺跡は、千曲川が宮中丘陵にはばまれ、北東から北に流路を変更した直後の下流域に存在する。千曲川は、西の大倉崎・上野丘陵、東の太子林の丘陵によって狭められている。これは、盆地形成にかかる褶曲構造の背斜部に両丘陵が相当し、千曲川の下刻により分断されたと考えられている。

太子林の丘陵は、千曲川東岸にあり、丘頂は昭和2年のグラウンド造成により削平されているが、現標高は353.3mを計る。この丘頂の東斜面は、昭和55年に通称関沢バイパス建設に伴い太子林遺跡の発掘調査が実施されている（飯山市教委 1981）。

今回の調査箇所は距離で約500m南、標高で約30m低い丘陵端部で、台地上は比較的緩やかであるが、東・南・西はそれぞれ急傾斜で低地や千曲川に接続している。

遺跡の東側には、江川の低地を挟んで、南北に関沢バイパスが通っている。また、南には千曲川に大関橋が架かっている。

2 周辺遺跡

遺跡の所在する瑞穂地区及び対岸の常盤大倉崎・上野地区にかけては、多くの遺跡が存在している（図2・3）。ただ分布については、必ずしも明確に把握しているわけではない。以下に明らかな部分について時代別に述べて行くことにする。

1) 旧石器時代

飯山地方は時代の遺跡が比較的多く存在していることで知られているが、特に密集しているのが太子林遺跡を中心とした周辺である（図2）。飯山地方において調査がなされている遺跡には小坂・太子林・関沢・日焼・屋株・上野・小泉・トトノ池南・新堤遺跡など数多い（飯山市教委 1981・1991・1992 望月1982 aほか）。これらの調査結果から、飯山地方の旧石器時代編年試案を作成したが（飯山市教委 1991）、現在までのところいわゆるAT下位の石器群は発見されていない。

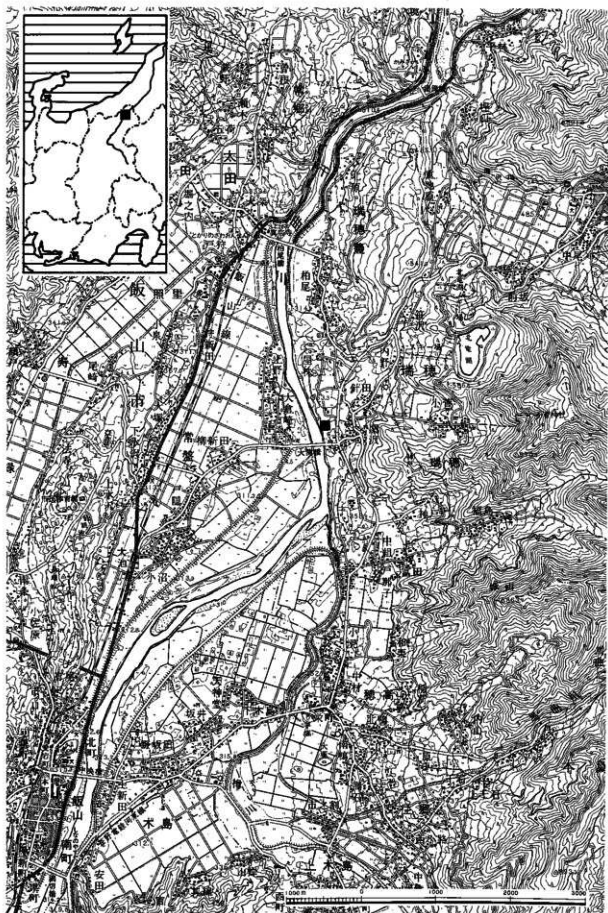


図1 太子林選跡第II地点の位置 (1:50,000)

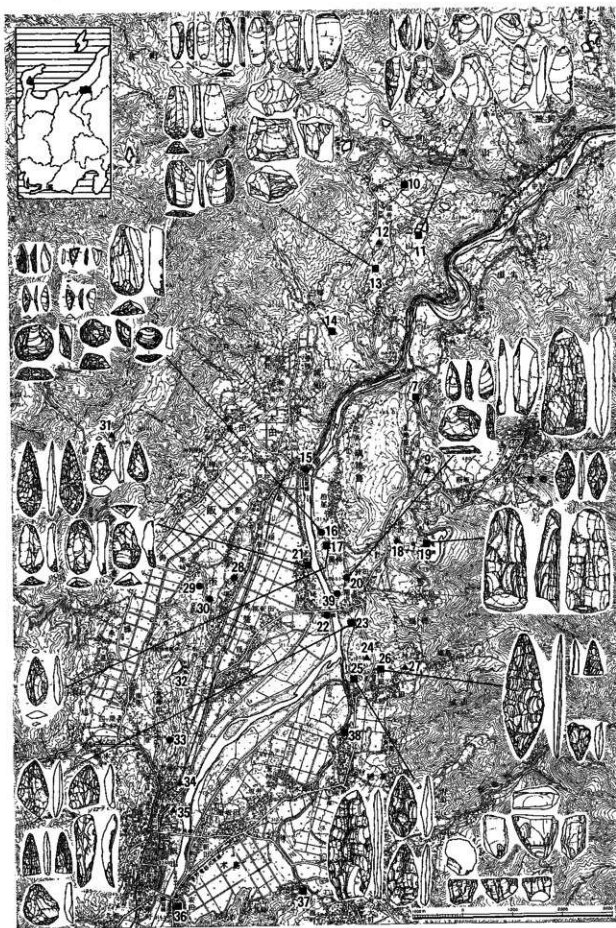


図2 飯山地方の旧石器



№	遺跡名	所在地	発見	主要石器	文献・その他
1	天代トド	下水内郡栄村天代トド	○	尖頭器	飯山北高地歴部OB会1978
2	小坂	下水内郡栄村大久保小坂	●	ナイフ形石器・彫器・撻器 刃器・尖頭器	高橋1962 栄村教委1976 中島1982
3	仙当	下水内郡栄村月岡仙当	○	剥片	飯山北高地歴部OB会1979
4	村木	下水内郡栄村箕作村木	○	剥片	同上
5	横倉	下水内郡栄村北信地蔵堂	●	尖頭器・剥片	同上
6	東大滝	下高井郡野沢温泉村東大滝	●	ナイフ形石器・尖頭状石器 彫器・撻器・石核	坂詰1974
7	坪山	下高井郡野沢温泉村坪山	○	尖頭器	信濃史料1956 坂詰1974
8	上の平	下高井郡野沢温泉村上上の平	○	尖頭器(単独出土)	坂詰1974
9	重地原	下高井郡野沢温泉村重地原	○	剥片	飯山北高地歴部OB会1979
10	オリハンザ	飯山市一山温井オリハンザ	○	尖頭器・細石核・細石刃	信濃史料1956
11	新堤	飯山市一山	●	ナイフ形石器・石核	飯山市教委1991
12	温井(飯)	飯山市一山	○	剥片	飯山市教委1986
13	トトノ池南	飯山市一山	●	撻器・石核	飯山市教委1991
14	雨池グラウンド	飯山市常盤	○	尖頭器・剥片	望月1986
15	真宗寺裏	飯山市常盤大坪	○	ナイフ形石器	飯山北高地歴部OB会1979
16	日焼	飯山市瑞穂日焼・南原	●	ナイフ形石器・撻器・削器 尖頭器・敲石・石核・鏃	飯山市教委1989
17	屋株	飯山市瑞穂屋株	●	尖頭器・剥片	飯山市教委1989
18	内野	飯山市瑞穂内野	○	撻器	飯山市教委1990 b
19	北竜湖	飯山市瑞穂堂道平	○	尖頭器・細石核・片刃石斧	飯山北高地歴部OB会1979
20	太子林	飯山市瑞穂(関沢)太子林	●	ナイフ形石器・撻器・彫器 局部磨石石斧・鏃・石核	飯山市教委1981
21	上野	飯山市常盤(上野)外和柳	●	ナイフ形石器・尖頭器 撻器・石核	飯山市教委1990 a
22	浦付	飯山市常盤(大倉崎)浦付	○	ナイフ形石器	信濃史料1956
23	関沢	飯山市瑞穂(関沢)畦高	●	尖頭器・尖頭削器・撻器	飯山市教委1981
24	宮中	飯山市瑞穂宮中	●	剥片	
25	千苜	飯山市瑞穂千苜	○	尖頭器・撻器・彫器・細石核	中島1982 飯山市教委1990 b
26	城ノ前	飯山市瑞穂(中組)城ノ前	○	尖頭器	高橋1980
27	木原	飯山市瑞穂(富田)木原	○	尖頭削器	飯山市教委1990 b
28	大塚	飯山市常盤(大塚)屋敷添	●	ナイフ形石器・彫器・石核	飯山北高地歴部OB会1979
29	尾崎南(飯)	飯山市寿(尾崎)東長峰	○	剥片	望月1986
30	小泉	飯山市常盤長峰越	●	ナイフ形石器・彫器	飯山市教委1989 b
31	桂池	飯山市寿桂池	○		飯山北高地歴部OB会1979
32	針尾池	飯山市常盤長峰(針尾池)	○	剥片	飯山北高地歴部OB会1979
33	長峰(飯)	飯山市小佐原下長峰	○	剥片	飯山北高地歴部OB会1979
34	有尾	飯山市飯山(有尾)	●	剥片	
35	城山	飯山市飯山(飯山城)	○	剥片	
36	安田神社境内	飯山市木島安田飯綱神社	○	細石核	信濃史料1956
37	山岸	飯山市木島山岸	○	尖頭器・撻器	
38	鬼久保	下高井郡木島平村穂鬼久保	○	尖頭器	
39	太子林第Ⅱ地点	本報告			

表1 飯山地方の旧石器時代遺跡

ここでは、太子林遺跡周辺遺跡に限り若干の説明を加えたい。昭和63年に調査した日焼遺跡では、小型ナイフ形石器に代表される石器群が発見された。黒曜石製の円形搔器の伴出が特徴的で、終末期ナイフ形石器石器群として捉えている。同じ年に調査した屋株遺跡では、尖頭器を特徴とする石器群が出土している。また、昭和63年以降数次にわたる上野遺跡の調査では、玉髓製の搔器に尖頭器が伴うと推定される石器群が出土している。

この他、調査はなされていないが、千苜（中島 1982）をはじめ城ノ前、木原、北竜湖、内野でも良好な石器が採集されている（高橋 1980）。

以上の遺跡の立地は、大部分が千曲川河岸の段丘上に立地しており、千曲川と密接な関係を有していたことは想像に難くない。また、北竜湖例は湖沼周辺に立地する遺跡の典型例として注目される。

2) 縄文時代

縄文時代に属する遺跡で、最も古い土器が採集されているのは北竜湖遺跡である。湖岸より裏表縄文・押型文・条痕文系土器片が採集され、草創期・早期に位置付けられる（高橋 1980）。道添遺跡でも条痕文系土器が採集されている。

前期の遺跡では、大倉崎遺跡以外は量的にも少量の遺跡がほとんどである。大倉崎遺跡に近い瀬付遺跡、北竜湖遺跡、宮中遺跡、太子林遺跡などで出土している。宮中遺跡は、昭和53年に市立東小学校建築にともない試掘調査を行い、諸磯式に比定される格子目文土器が出土したが、遺構は検出されなかった（飯山市教委 1979）。また、太子林遺跡は昭和55年に調査が行われ、有尾式土器片と土坑が検出されている（飯山市教委 1981）。

中期の遺跡では、まず上ノ原遺跡が挙げられる。調査は行われていないが、舌状台地の縁辺から大量に採集されている。五領ヶ台系・阿玉台系土器が若干認められるものの、多くは蓮華文・格子文などを特徴とする北陸の新保・新崎式土器に比定される土器が多い（高橋 1980 a）。このほか宮中では古くから土器片が多く採集されている。

後期では宮中遺跡が重要である。昭和55年の調査によってわずか100m²の範囲に23基の石棺墓が検出された。墓坑内より浅鉢が伏せた状態で出土し、さらに浅鉢の中から竹製の漆塗櫛が出土している。ほかの石棺墓からも碧玉・耳栓状耳飾りが出土している。周辺より出土した土器より堀ノ内～加曾利B式期に比定している（高橋 1980 b）。なお北竜湖遺跡でも若干出土している。

晩期の遺跡は、当該地区では確認されていない。

3) 弥生時代

稲作が開始された弥生時代は、飯山地方では、秋津田草川尻遺跡・長峰丘陵上の諸遺跡が著名であり、瑞穂地区では太型蛤刃石斧が単独で採集されていたにすぎない。太子林遺跡対岸の上野遺跡では、中期から後期にかけての集落址16軒、掘立柱建物址25棟以上が発掘されており、加えて木棺墓・礎床墓が72基が検出されている。おそらく当該期の中心的な集落であったと思われる。

なお、長峰丘陵上の遺跡のうち分布図に示した道跡は、旧照里小学校遺跡、光明寺前遺跡、照丘遺跡の3遺跡である。調査が行われたのは照丘遺跡で、住居址をはじめ弥生中期栗林式土器・建築用材と推定される木製品が出土している（高橋 1962、飯山市教委 1993ほか）。

4) 古墳時代

三世紀末から七世紀にかけて王もしくはそれにつかえた家族たちが大きな墳丘の墓を造った時代である。

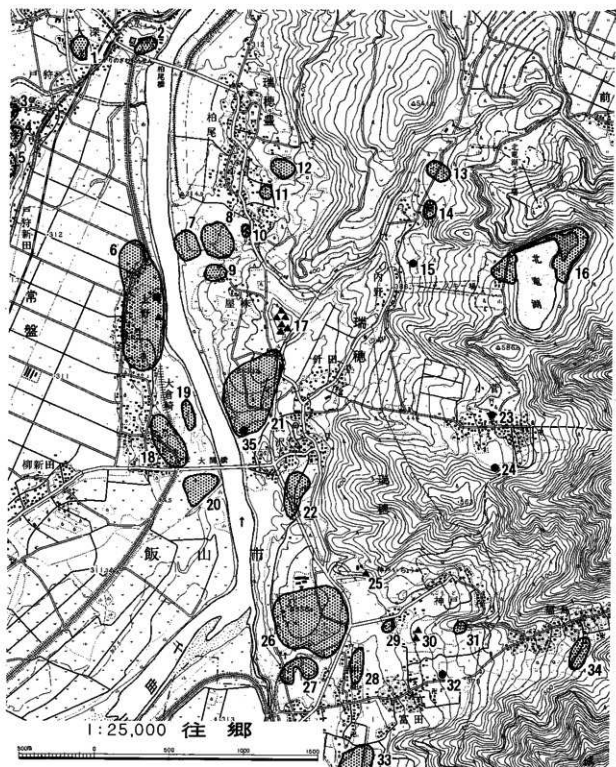


図3 岡辺遺跡の分布図 (1:25,000)

1.岡峰 2.真宗寺 3.旧照聖小学校 4.光明寺前 5.照所 6.上野・上野古墳・大倉崎館跡 7.口地 8.城の前 9.照休 10.碓ノ沢 11.柏尾南館 12.上ノ風 13.道部 14.水出口 15.内野 16.北電池 17.向崎古墳群 18.大倉崎 19.大倉崎II 20.瀬附 21.太子林 22.岡沢 23.小舟神社土宮 24.南電池 25.敷原古墳 26.百中 27.千寿・大阿蘇 28.城の前 29.築岡田 30.神ノ古墳 31.神ノ城 32.木原 33.尾崎 34.守下 35.太子林第II地点

上野古墳、向峰古墳群、飯綱堂（狐塚）古墳、神戸古墳群が確認されている。飯綱堂古墳では石室が露呈しており、土師器・鉄鏃が出土したという。また、照丘遺跡では円形周溝が検出され、古墳の周溝の可能性がある（高橋 1968）。

一方集落遺跡では、弥生時代に続き上野遺跡が挙げられる。しかし、上野遺跡では前期の集落址や周溝壕、北陸系土器などで、中期・後期の集落址は発見されていない。

5) 古代・中世

奈良時代以降をまとめて概観する。現在までのところ明確に奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡では上野遺跡、尾崎遺跡、屋株遺跡、大倉崎II遺跡が挙げられる。上野遺跡では竪穴住居址36軒、掘立柱建物址11棟などが発掘されており、古墳時代以降再び当地域の中心的集落となったものと思われる。

尾崎遺跡は圃場整備によって無残にも破壊されてしまったが、多量の土師器片が採集されている。屋株遺跡は昭和63年に調査がなされ竪穴住居址1軒、土坑が検出され、須恵器坏、蓋、土師器坏、甕等が出土している。年代は9世紀中～後半におかれる。大倉崎II遺跡は千曲川べりの新期河岸段丘上にありやや高くなっている。上野遺跡の平安期集落址との関係や生業について、注目される立地環境である。

平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。城館跡は、大倉崎館跡、柏尾南館跡、関沢館跡、大飼館跡、神戸城跡などが確認されている。また、集落遺跡は、現在までのところ調査を行っていないし、また確認もされていない。これは、中世の考古学的調査が充分に行われた経過がないためであって、今後明確になるであろう。例えば、大倉崎地区内で中世珠洲系陶器の完形品が発見されており、集落址の存在を裏付ける資料が出はじめつつある。

引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1979 「宮中遺跡—分布確認調査報告—」
飯山市教育委員会 1981 「太子林・関沢遺跡」
飯山市教育委員会 1989 「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ」
飯山市教育委員会 1990 「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ」
飯山市教育委員会 1993 「照丘遺跡Ⅲ」
高橋 桂 1962 「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃14-11』 信濃史学会
高橋 桂 1980 a 「瑞穂のあけぼの」『新編瑞穂村史』 瑞穂村史刊行会
高橋 桂 1980 b 「宮中遺跡発掘調査—石棺状遺構を中心として」『高井51』 高井地方史研究会
中島庄一 1982 「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について」『信濃34-4』 信濃史学会
望月静雄 1982 a 「太子林・関沢遺跡」『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡北・東信』 長野県史刊行会
望月静雄 1982 b 「北信濃関沢遺跡の石器群」『信濃34-4』 信濃史学会

Ⅲ 発掘調査

1 調査の経緯

1) 調査に至るまでの経過

平成9年6月、庁内の関係部局に平成10年度の工事計画の照会を行なったところ、同年7月に回答を得た。その結果、飯山市瑞穂地区において農村集落排水処理施設の建設が計画されていることがわかり、その計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地太子林遺跡の範囲内であることが確かめられた。

同年10月、庁内協議の結果、工事実施前に緊急発掘調査を行なう。調査に伴う費用は下水道課が予算化する。調査は市教育委員会が行なう。予算額は5,570,000円とすること等で合意した。

平成10年5月18日、県教育委員会教育長宛埋蔵文化財発掘の届出を行う。

6月5日、市長と委託契約書を取り交わす。

6月12日、県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がある。

8月17日、地元の瑞穂農村集落排水組合および土地関係者、市教委・下水道課・調査団と太子林遺跡緊急発掘調査に伴う関係者会議を行なう。

2) 調査経過

8月17日 器材運搬。午後7時、瑞穂地区民芸館にて農業集落排水組合、関沢区長、瑞穂公民館、関係地権者及び下水道課・市教委で関係者会議を行なう。

18日 地権者との境界立会い。残土処理置場の依頼を行なう。

19日 重機による表土除去。草木除去。トイレ等を設置し、一部調査に入る。

20日 重機による表土除去継続。ジョレンにて精査。

21日 表土除去続行。業者による基準点設置（4点）。一部グリット設定。

22日 表土除去続行。

24日 トランシットによりグリット設定。調査区全般をジョレンにて精査。

25日 調査区全般ジョレンにて精査。モデルセクション深堀り。

26日 ジョレンがけ精査。F・G-13区ビット群（縄文前期）写真撮影。掘り下げ着手。F・G-14区、移植ゴテによりテフラ層掘り下げ。G-11区モデルセクション実測。

28日 L・Mラインジョレンにて精査。台風に伴う施設の点検を実施。

9月1日 G・H-11区、Ⅲ層掘り下げ。F~H-14区Ⅳ層掘り下げ。F-14区、Ⅳ層内よりナイフ形石器出土。H-13区Ⅳ層掘り下げ、Ⅴ層直上より石器数点出土。C-11区出土旧石器写真撮影。

2日 H程の関係で本口調査開始式を行なう。G・H-12区、H-13・14区、G-15区精査続行。H-14区調査着手。H-13区で石器群のまとまりあり。

3日 G・H-11区・G-12区、ジョレンから移植ゴテに切り替えて精査。H-12区ジョレンがけ開始。F・G-14区・H-13・14区、Ⅴ層上面まで調査完了。H-14区東南隅で頁岩製の石杖出土。F-15区ジョレン精査から移植ゴテ精査、Ⅴ層面出始める。I-13区ジョレンがけ

- 精査開始。I-15区石を残しながら移植ゴテで精査開始。
- 4日 G-12区掘り下げ、石器約10点出土。H-13区石器出土状況写真撮影。H-14区V層と石器出土層的位置について写真撮影。I-13区V層直上まで調査完了。I-14区IV層下までは調査完了。I-15区IV層調査、礫多い。G-13区縄文ビット清掃。G-15区、IV層まで石器多い。
- 7日 G-11・12区、H-12区、I-13~15区精査続行。L-11区着手。
- 8日 昨日の調査地区続行。
- 9日 I-13区、V層中を掘り下げ。H-15区着手。その他継続区調査続行。
- 10日 11・17・18・21・24・25・26日 調査続行。
- 28日 L-11区調査完了。L-12区調査着手。
- 29日 L-12区より大形ナイフ形石器（頁岩製）出土、写真撮影。J-12区着手。K-16区出土状況写真撮影。調査区近景写真撮影。
- 30日 F-14・15区分布図作成。J~K-12区精査続行。H-15区再着手。
- 10月2日 F-15区さらにV層上面まで掘り下げ。その他のグリット調査続行。
- 5日 I~L-12区、J-13区精査続行。J-16区調査完了。J-15区着手。
- 6日 J-13区清掃、写真撮影。I~L-12区、I-15区精査続行。J・K-12区に礫群。
- 7日 I-13区清掃、写真撮影。I~L-12区精査続行。
- 9日 雨のため足場が悪いために新調査区に入る。K-13・14・15区、L-16区着手。J・K-12区出土礫群写真撮影。J-15区において安山岩の石核等石器がまとまって出土。
- 12日 I-15区周辺の石器群清掃、写真撮影。K-13・14区精査続行。L-12区はほぼ掘り下げ完了。J-12・15区、L-11区掘り下げ再着手。
- 13日 L-12・13区清掃。L-16区は調査完了。
- 15日 L-11・12区清掃の後、写真撮影。J-12区・L-14・15区掘り下げ続行。
- 19日 L-11・12区遺物実測。J-12・13区調査は完了。J-11区着手。I-12・13区遺物分布図作成の後取り上げ。
- 20日 H・I-14・15区遺物分布図作成着手。J・K-12・13区清掃、写真撮影。L-11・12区遺物群レベル測量。L-11区遺物取り上げ。L-13区、I-11区着手。J-11区精査続行。
- 22日 各グリット出土石器群、遺物分布図作成。
- 23日 L-11・12区出土遺物取り上げ、後精査。J・K-12・13区遺物分布図作成、取り上げ。I・J-11区精査続行。L-15区着手。
- 26日 J・K-12・13区出土礫等実測。
- 27日 L-13区完了。J・K-12区出土礫群、分布図・レベル測量、のち取り上げる。K-14区完了、L-14区へ移動。I-13区清掃着手。I・K-11区精査続行。K-11区、下部より石器が多く出土。J・K-14~16区メッシュを張り実測着手。L-11・12区清掃着手。
- 28日 I-14・15区出土遺物レベル測量完了。遺物取り上げ。K-15区出土遺物レベル測量完了。I-11区は終了。J-11区精査続行。K-11区着手。I~L-12・13区清掃・写真撮影。
- 30日 調査続行。
- 11月2日 L-11・12区出土礫実測作業。L-13・K-11区調査終了。J-14・15区再度掘り下げ続行。K-13・14区石器残り取り上げ。G-13区縄文遺構掘り下げ。I・J-14区遺物取り上げ。

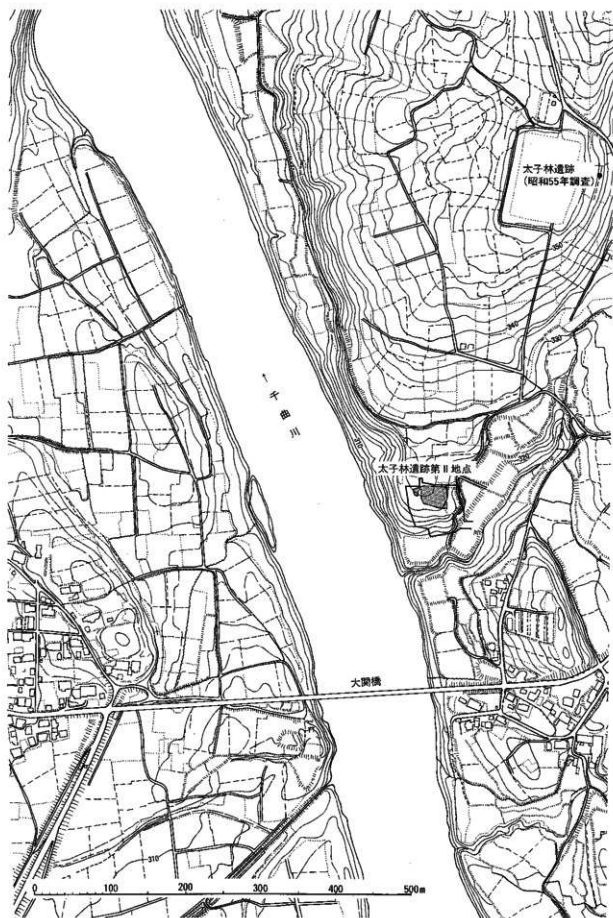


圖4 周辺地形図 (1:5,000)

4日～5日 残りの調査区掘り下げ・遺物分布図作成。

6日 器材等片付け。調査終了。

7・9日 補遺調査。実測図等確認してすべての現地作業を終了する。

2 調査

1) グリットの設定と調査方法 (図4・5・6)

調査対象地は、太子林の丘陵南端にあり、東・西・南側はともに急斜となって低地や干曲川に面している。工事造成予定地区は、台地の一部から南側斜面にかけての部分であり、およそ約2,000㎡の面積である。地目は山林がほとんどであり、東斜面端部にやや削土されて畑となっていた。当初この部分のみの発掘となると予想していたが、重機での表土除去の結果、雑木の根が比較的浅いため多くの対象区が調査可能となった。また、台地南側より西側にかけて道路が造成されており、その部分はすでに削土されていた。したがって、調査可能となった部分は、台地平坦部から斜面にかけての約1,000㎡であった。

表土除去は、II層中面を基準としたが縄文時代以降の遺物がほとんど見られなかったことから、注意しながらIII層上面まで除去した。残土は、隣接地権者の好意により調査地区外に搬出することができた。

グリットは、国家座標軸に準じて設定した。一辺5mとし東西にアルファベット、南北に算用数字を用いた。業者により4点の座標杭設定を委託したが、以降についてはトランシットを用いて設定した。

遺物の取り上げは、1mメッシュを設定して、すべての遺物についてドットマップを20分の1で作成、各レベルも測定、遺物番号はグリット毎に付した。なお、礫群については10分の1で微細図を作成し、上・下端レベルを計測した。

なお、次項で触れるが遺物はIV層に含まれていたが、V層上面にクラックが発達しており、その中に遺物が出土することから、V層を下げながら遺物を検出していった。そのため、遺物がまとめて出土した部分の多くのグリットではV層中位まで調査している (図5)。

2) 文化層

調査区の基本的な土層は、G-11区の北麓において観察した(図7)。以下に、層序について説明を加える。

第I層 耕作土 層厚10cm～20cm。灰黒色を呈し耕作によりボロボロとしている。

第II層 黒色土層 層厚35cmから15cm。部分的に雑木の根等が入り込む。粘着性があり、まりはよい。

第III層 暗褐色土層 層厚15cm～5cm。いわゆるソフトローム層で、IV層のソフト化したものでII層の斬移層として捉えられ、汚れた火山灰層である。

第IV層 黄褐色土層 層厚10cm～20cm。緻密なテフラ層で、より明るい色調である。層厚はほぼ一定しているが、V層のクラックの落ち込みに深く堆積しており、50cmにも及ぶところがある。

第V層 褐色土層 層厚50cm以上。上面がいわゆる亀甲状を呈し、クラックの割れ目が見られる。砂・粘質土で乾燥すると非常に硬い。

旧石器時代石器群は、IV層中位からV層のクラックの中にまで落ち込んで検出される。特に密集して発見されたところでは、V層のクラック帯の上部に中心があるように見受けられた。また、クラック帯に発見される石器群は必ず落ちたように発見されることが多く、V層直上に生活面があったのが、後にクラック帯に落ち込んだと考えられる。以上のことから、本石器群の文化層はV層直上のIV層下部と判断される。また、集中部各地点との接合関係からも文化層は一枚と考えられる。

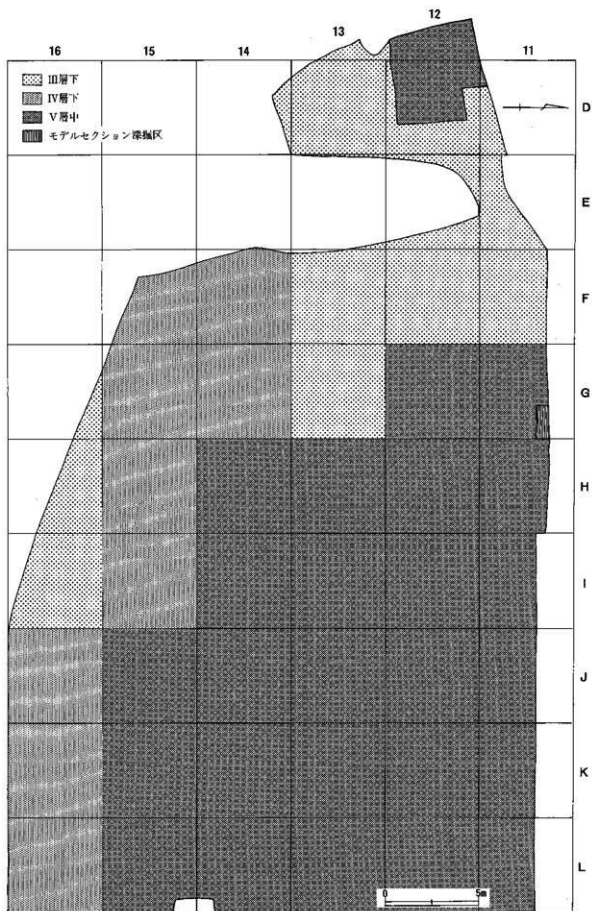


図5 発掘区深度図 (1:200)

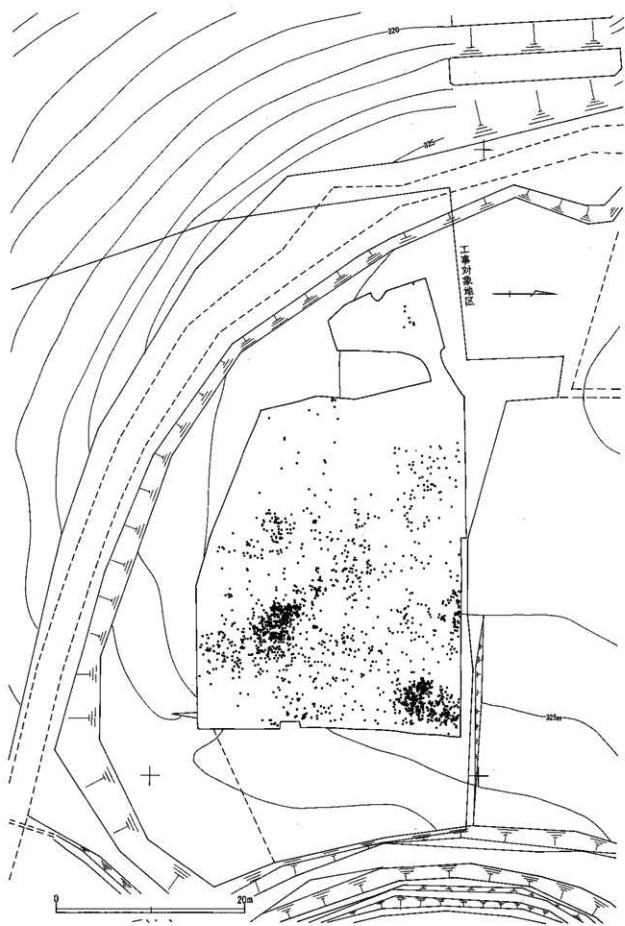


图6 遗物分布图 (1:500)

IV 遺物の出土状態

1 概要

調査区は、丘陵の端部にあり東・南それぞれに傾斜して低湿地に面している。比較的傾斜の緩いG～Iグリットでは比較的遺物の出土状態は希薄で、東側に傾斜していくJ～Lのグリットではいくつかのまとまりが見受けられる。

また、H・I-15区やL-13区において人頭大の礫がまとまって認められる。これらはV層以下に堆積している自然的な堆積物が上位に現れたものである。ただし、人為的に多少の移動が行なわれた可能性はある。

遺物は、IV層の中位からV層直上にかけて出土している。V層はクラックが発達しており、遺物はこの隙間にずり込むようにして発見されることが多く、斜位あるいは上下になって出土している。

遺物集合部（群）間の接合についてはすべての作業が完了していないが、いくつか群間接合することが確かめられており（図8）、現在のところすべて同一時期に残されたものであると考えている。

また、V層直上はIV層と明らかに土質が相違していることから遺構の確認の可能性が高かったが、精査してみたものの確認することは出来なかった。おそらく、建物等があったとしてもきわめて簡易な造りで、柱穴も明確なものではなかったのではないかと判断される。

2 遺物の集合

調査区内においては、遺物はほとんどすべてのグリットから遺物の出土があったが、粗密があって集中して発見される部分とほとんど検出できない部分とがあった。いくつかのまとまりに分割されるのではないかと思われるが、十分な整理作業が済んでいないので本報告ではまとまりが明確であったり、製品類が多く出土している1～5群についてのみ報告することとする。

なお、このほか5箇所において群として捉えられると予想しており、概ね10群によって構成されていたのではないかと考えられる（図8）。

第1群（図9）

G・H-11・12区のまばらに出土している部分を第1群として報告する。ほぼ平坦な地区であり、IV層

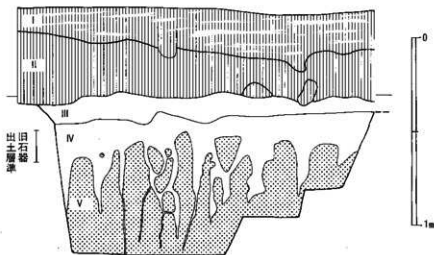


図7 層序（G-11区北壁）（1：20）

中位から下位にかけて出土しているもので、剥片が主体の群である。

第2群 (図10)

J・K-11区において検出されている石器群を一群とした。その中心は北側の調査区外に延びているものと判断される。本遺跡出土の剥片は第4群出土の石核に接合している。レベル差があり、IV層中位からV層のクラックの中にも多く入り込んでいる。比較的中形から大形の石刃が出土している。

第3群 (図10)

1号礫群を含む石器群のまとまりで、J・K-12区において検出されている。石器類は少ないが、礫群を取り巻くように剥片類が出土している。本群は黒曜石の剥片が多く出土している。礫群については別に触れる。

第4群 (図10)

L-11・12区において検出された石器群で、総数456点出土している。東側下端部は畑により削土されており、本来はもう少し広がっていたものと推定される。本群内には2号礫群がある。

石器は、約18cmの大形ナイフ形石器をはじめ石核や大形の剥片も数多く出土している。第2群及び第5群出土石器と接合する剥片がある。

第5群 (図11)

J・K-14・15区を中心として出土したまとまりを5群とする。もともと集中して出土した地区であり、製品類はもちろん剥片及び石核、大形剥片も出土している。また、砕片類も多く出土している。

なお、K-13区において遺物量は少ないが製品類が多く出土している(図8・6群)。5群とも接合する石器があり注目される。

また、9群は下層の礫がまとめて上部に現れている地区であるが(図12)、礫に混じって安山岩の石核が多数出土している。

3 礫 群

1号礫群 (図13)

第3群内、J・K-12区において検出された礫のまとまりで、総数約50点の礫で構成されている。その多くが焼礫であり破損し接合する例も多い。出土層位はIV層の上位から下位にかけてで、V層クラックに落ち込んでいる石器群に比してやや上位といえる。

2号礫群 (図14)

第4群内、L-11区において検出された礫のまとまりで、総数12点、8個体と少ない。北に位置している大きな礫は下層に含まれる礫である。焼けて赤化している礫はないが、ややくすんでいる礫もある。本地区のIV層下部はV層上面が崩れてIV層と混在しており、礫群はその中より出土している。

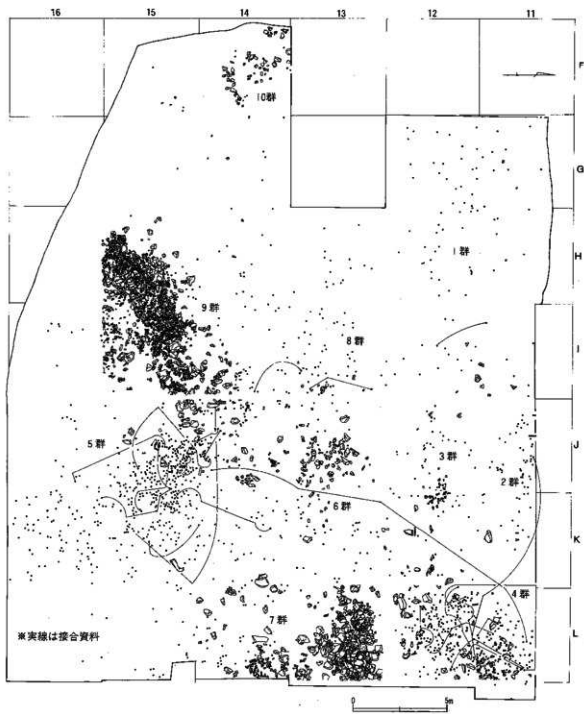


图8 遺物群分布図 (1:200)

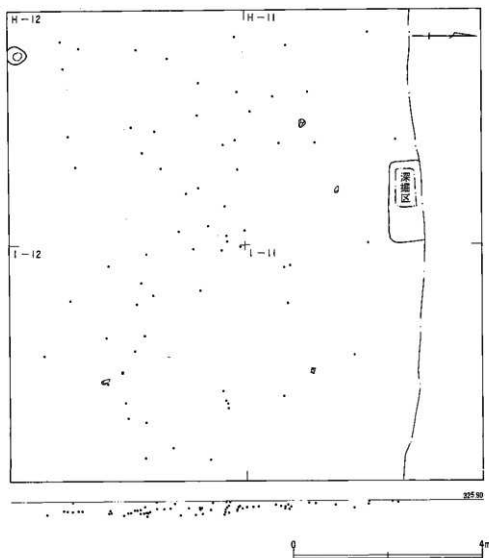


图9 1群遺物分布图 (1:80)

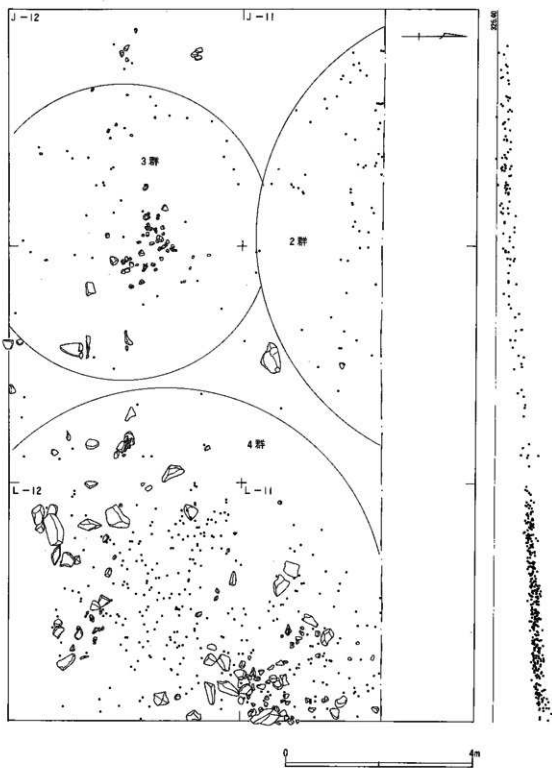


图10 2·3·4群遺物分布图 (1:80)

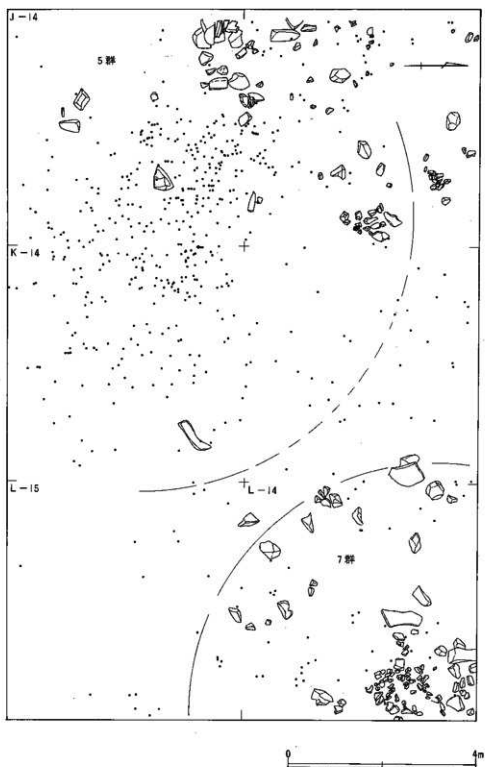


图11 5·7群遺物分布图 (1:80)

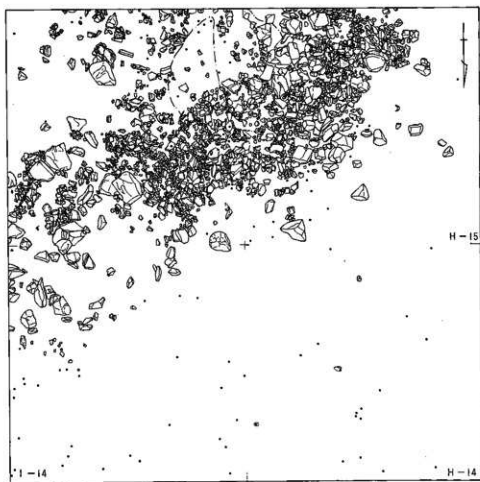


图12 9群渣物分布图 (1:80)

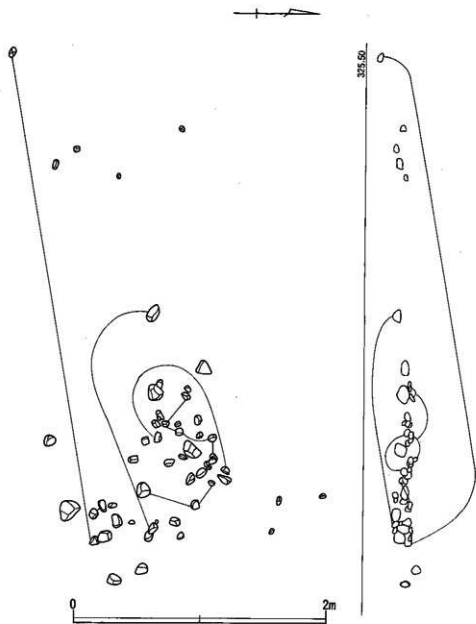


图13 1号礁群分布图 (1:30)

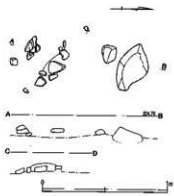


图14 2号礁群分布图 (1:30)

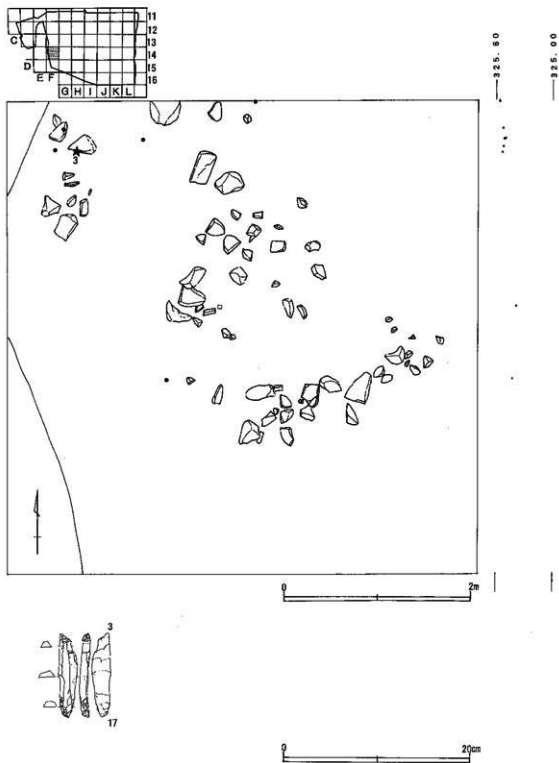


图15 F-14区遗物分布图 (1:40) (1:4)

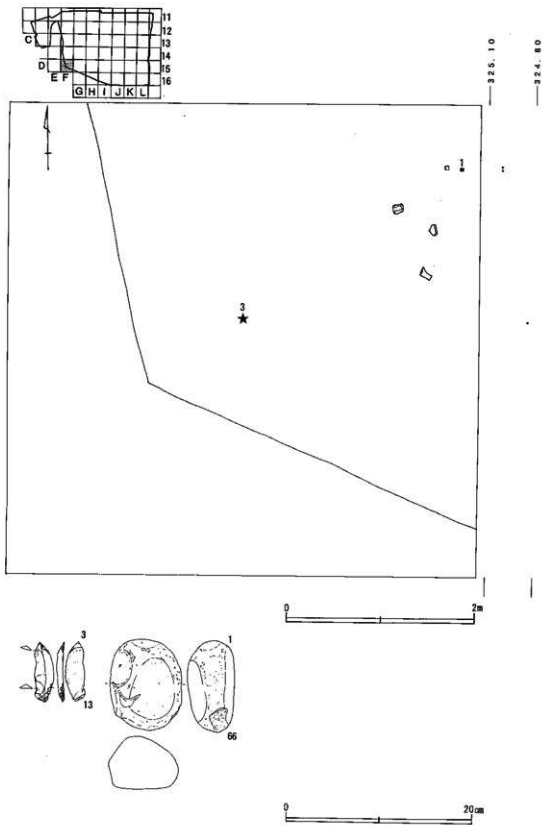


图16 F-15区遗物分布图 (1:40) (1:4)

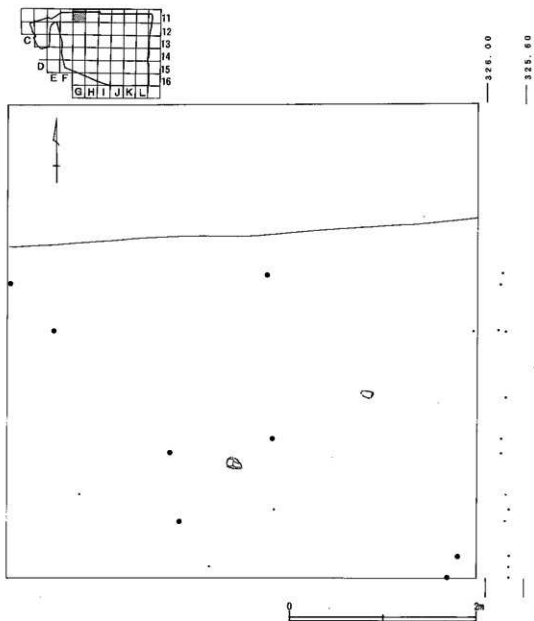


图17 G-11区遗物分布图 (1:40)

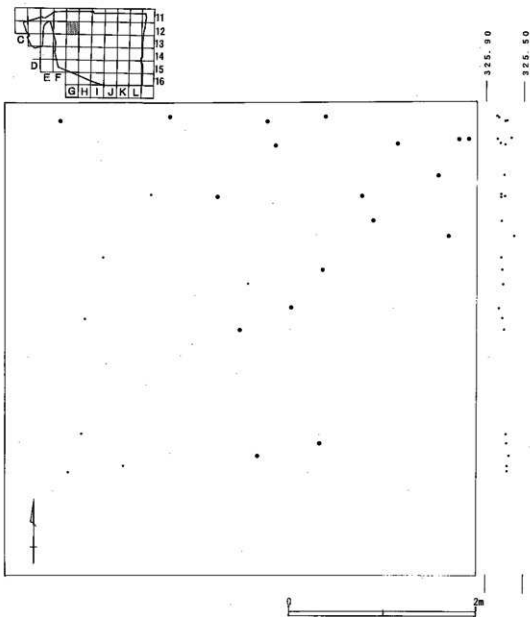


图18 G-12区遺物分布图 (1:40)

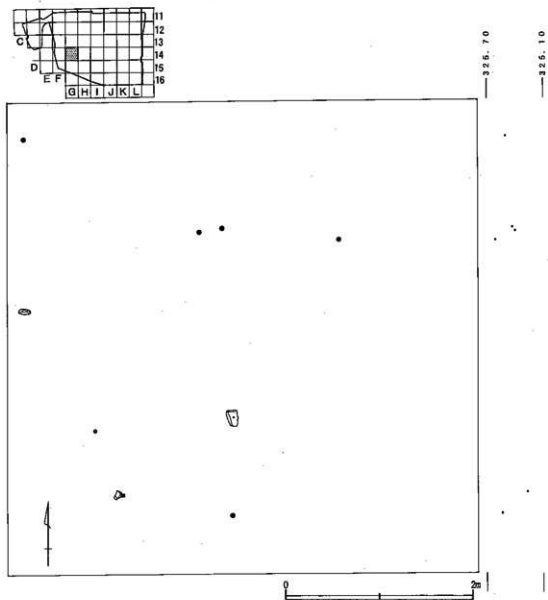


图19 G-14区遗物分布图 (1:40)

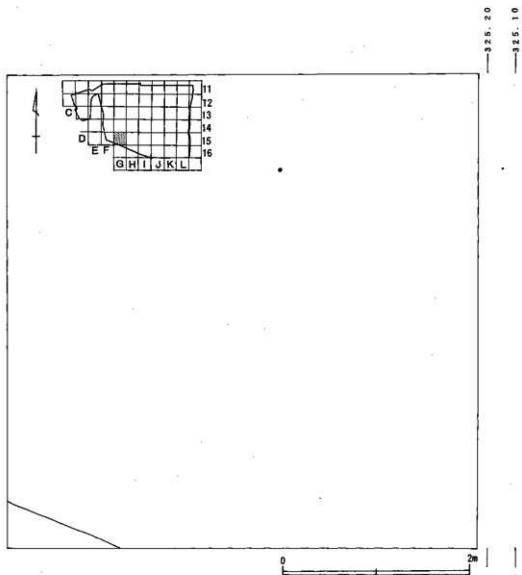


图20 G-15区遺物分布图 (1:40)

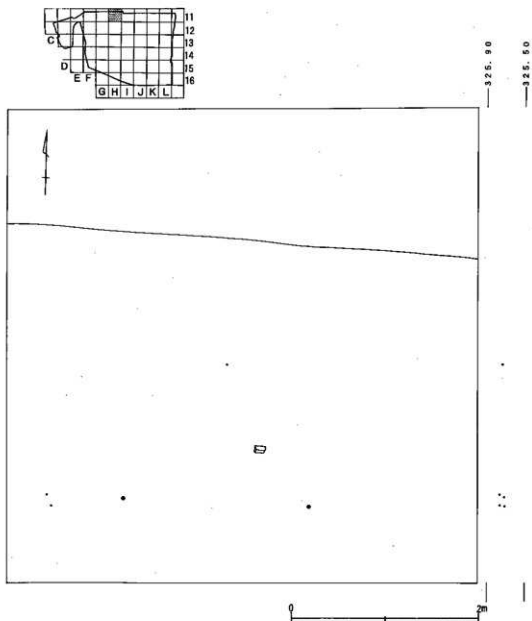


图21 H-11区遗物分布图 (1:40)

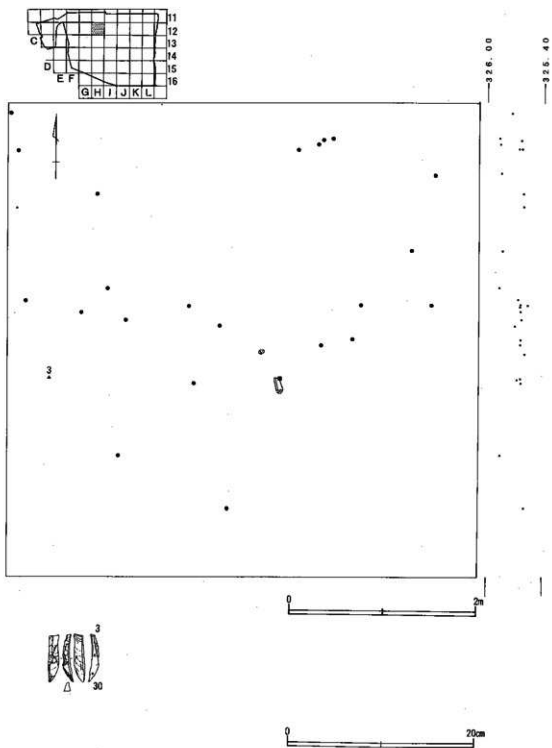


图22 H-12区遗物分布图 (1:40) (1:4)

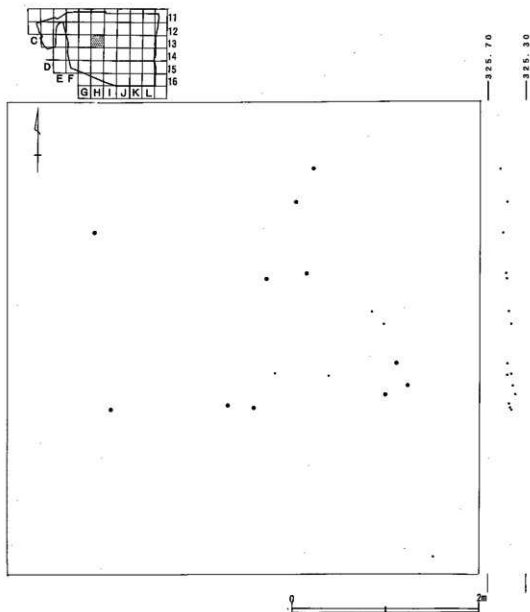


图23 H-13区遺物分布图 (1:40)

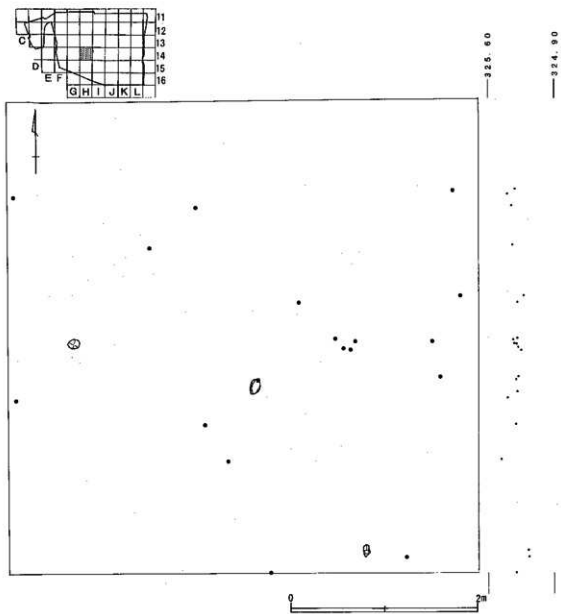


图24 H-14区遗物分布图 (1:40)

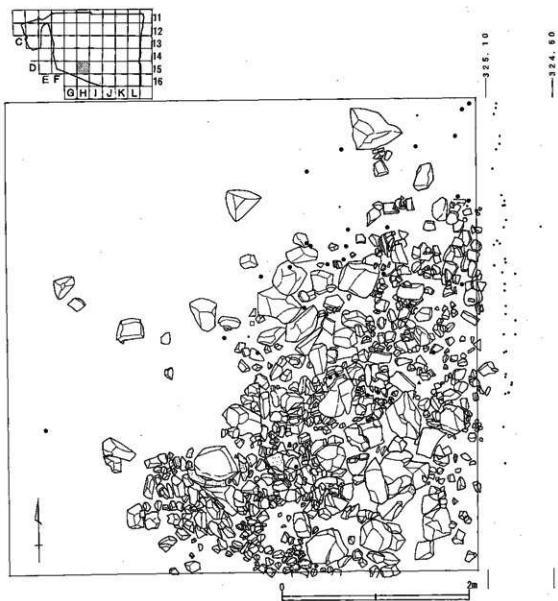


图25 H-15区遗物分布图 (1:40)

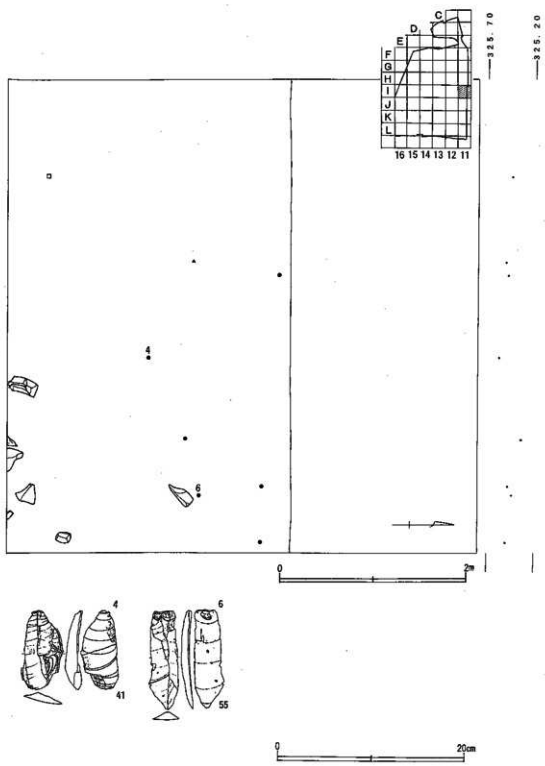


图26 I-11区遗物分布图 (1:40) (1:4)

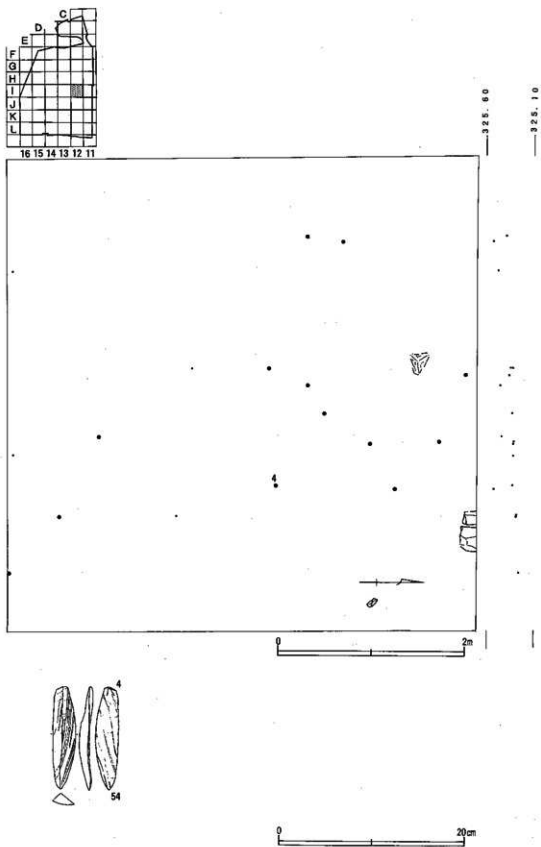


图27 I-12区遗物分布图 (1:40) (1:4)

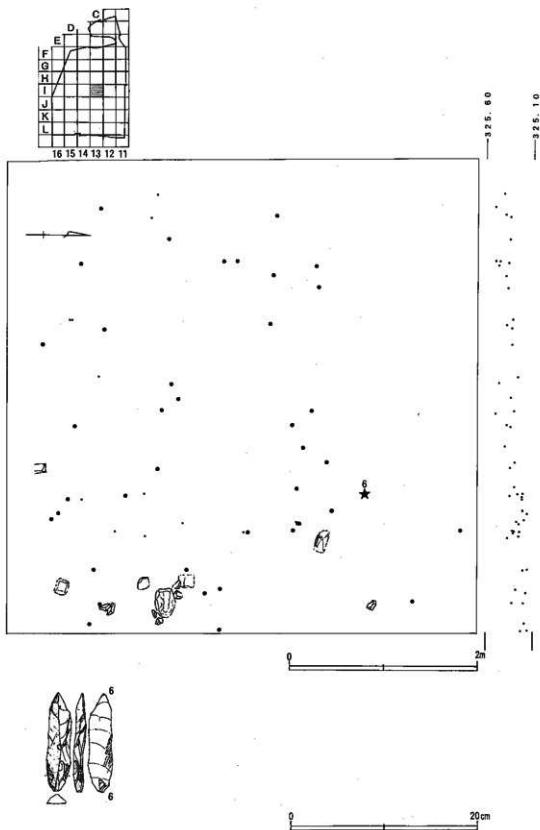


图28 I-13区遗物分布图 (1:40) (1:4)

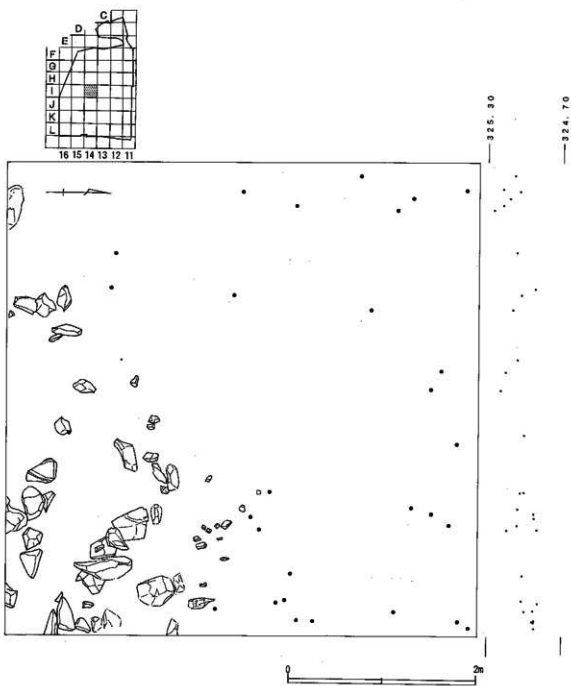


图29 I-14区遗物分布图 (1:40)

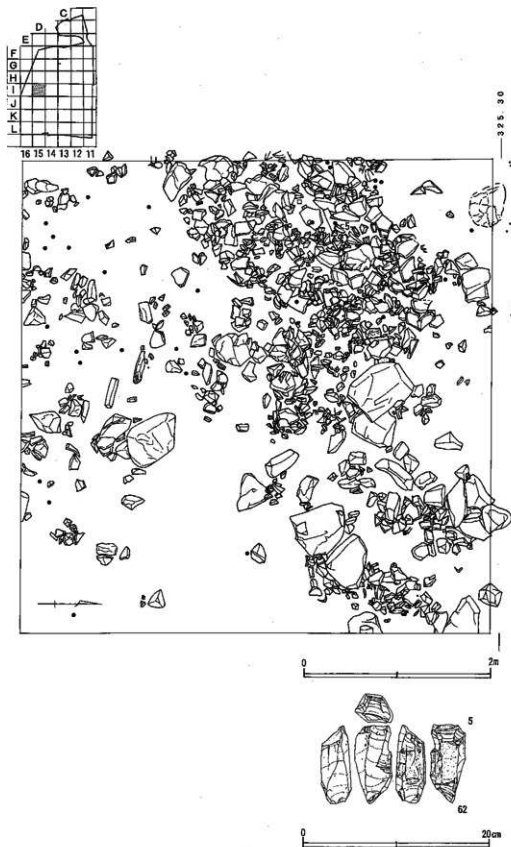


图30 I-15区遗物分布图 (1:40) (1:4)

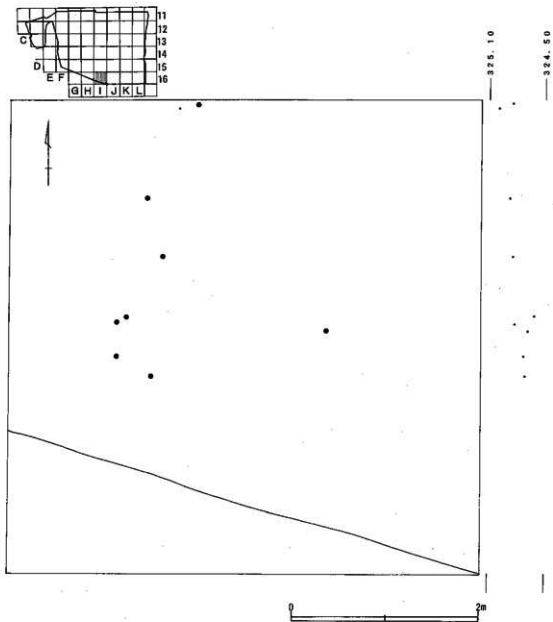


图31 I-16区遗物分布图 (1:40)

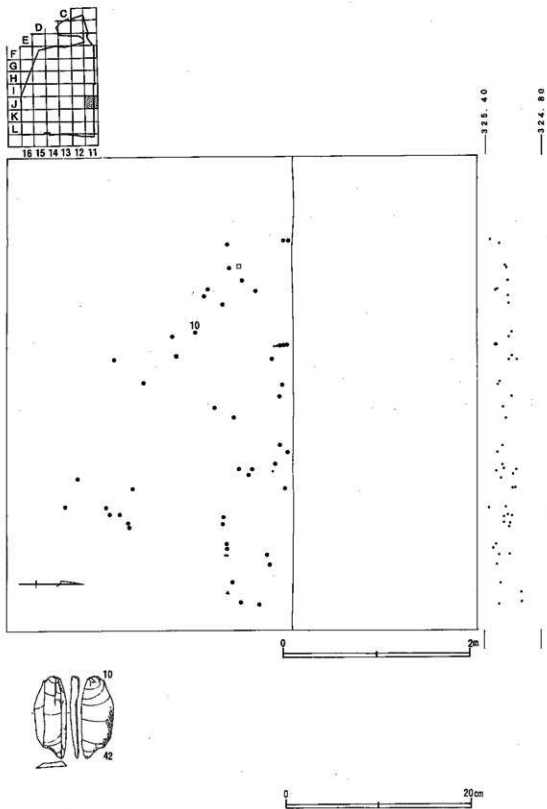


图32 J-11区遗物分布图 (1:40) (1:4)

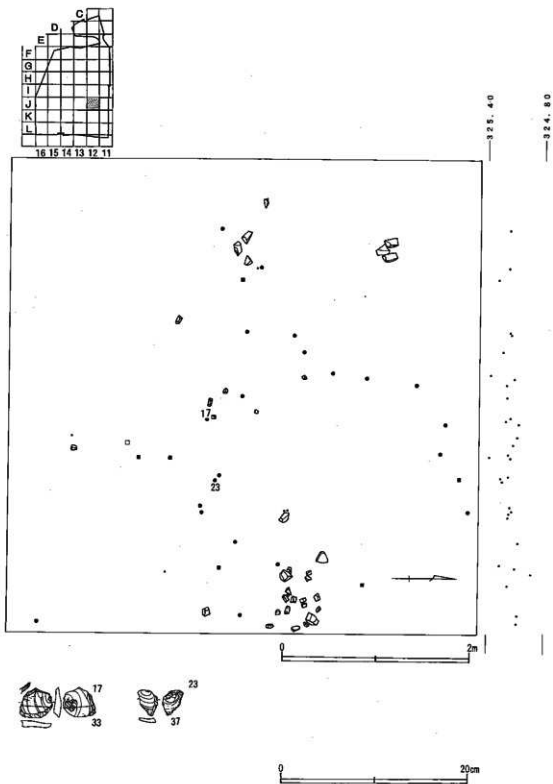


图33 J-12区遗物分布图 (1:40) (1:4)

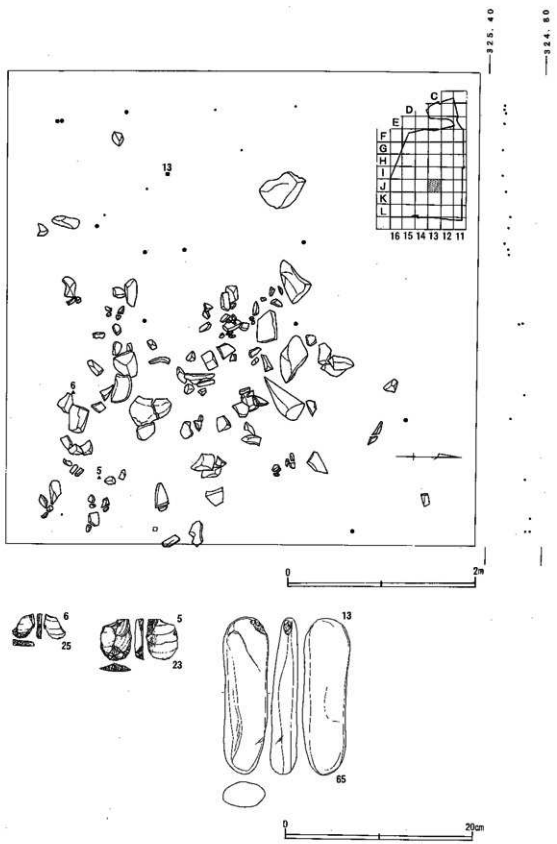


图34 J-13区遗物分布图 (1:40) (1:4)

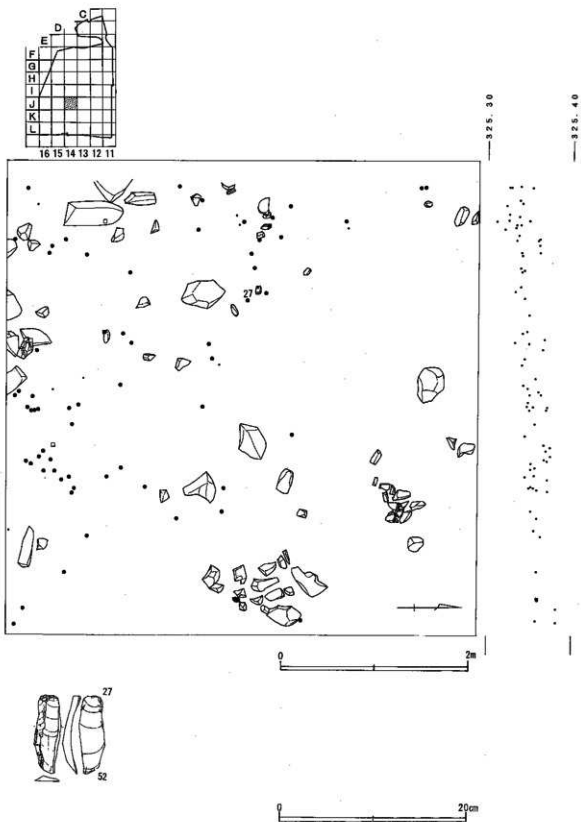


图35 J-14区道物分布图 (1:40) (1:4)

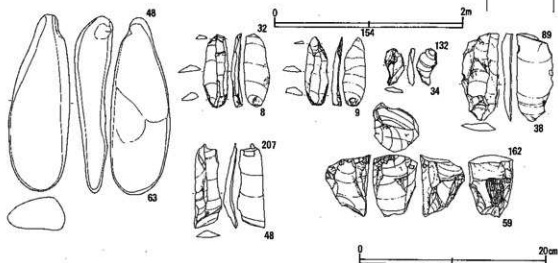
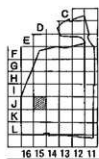


图36 J-15区遗物分布图 (1:40) (1:4)

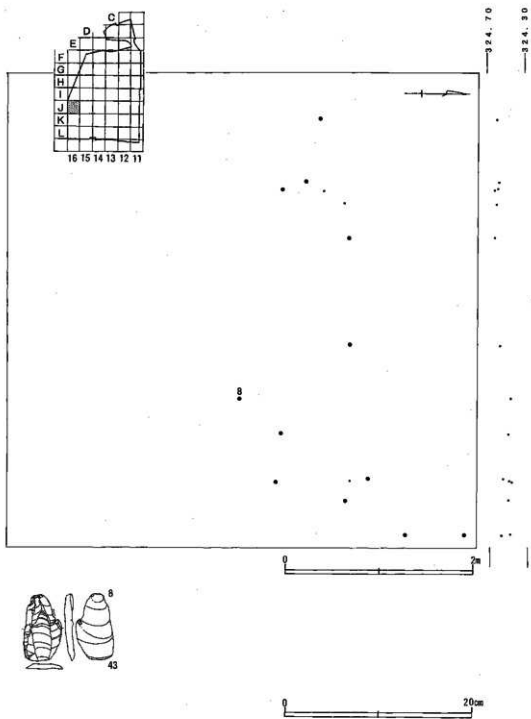


图37 J-16区遗物分布图 (1:40) (1:4)

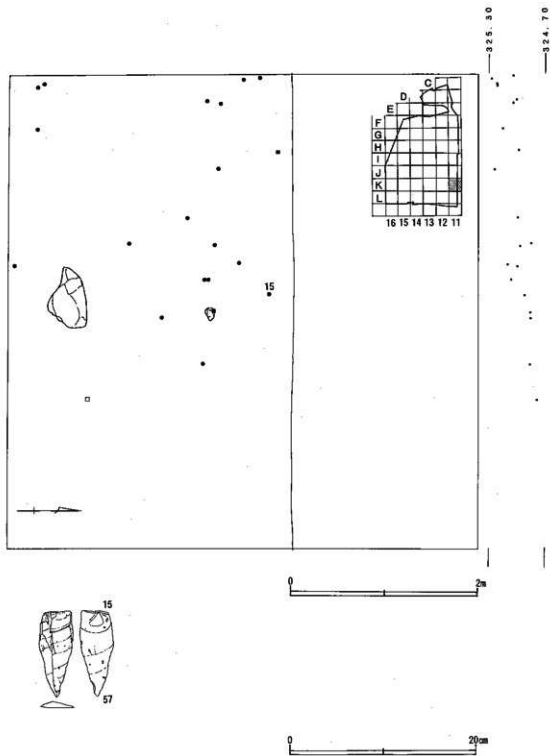


图38 K-11区遺物分布图 (1:40) (1:4)

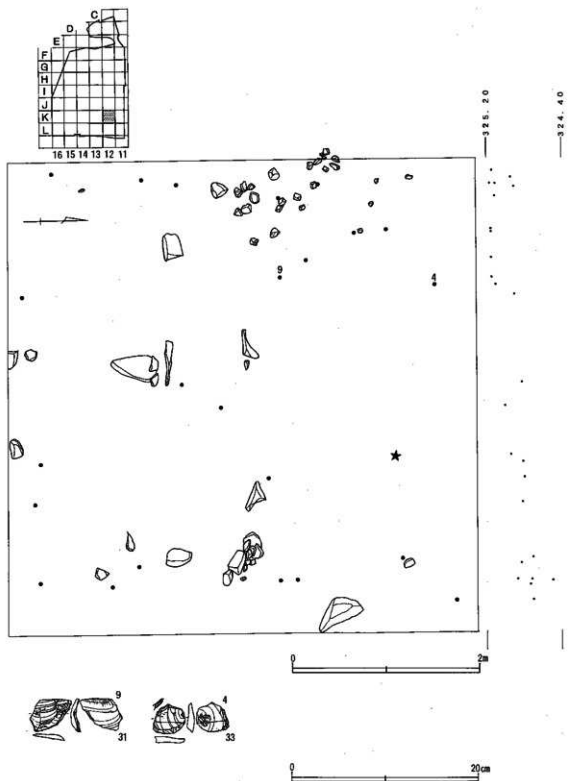
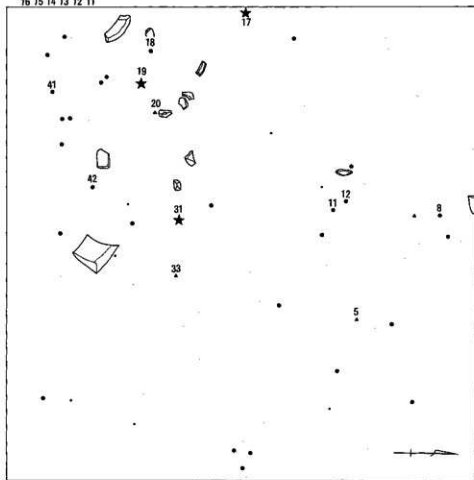
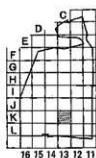


图39 K-12区遗物分布图 (1:40) (1:4)



— 324.90

— 324.30

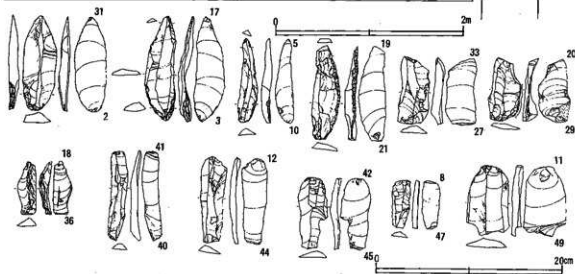


图40 K-13区器物分布图 (1:40) (1:4)

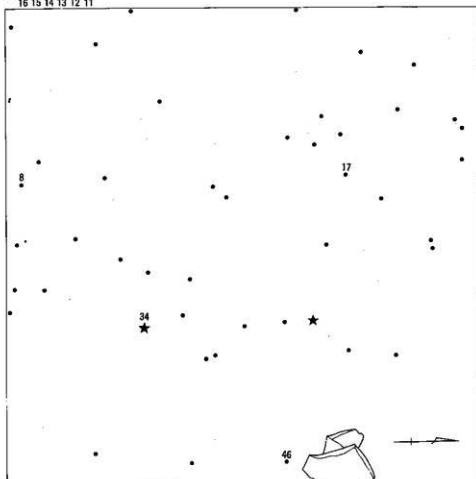
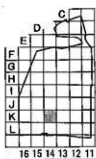
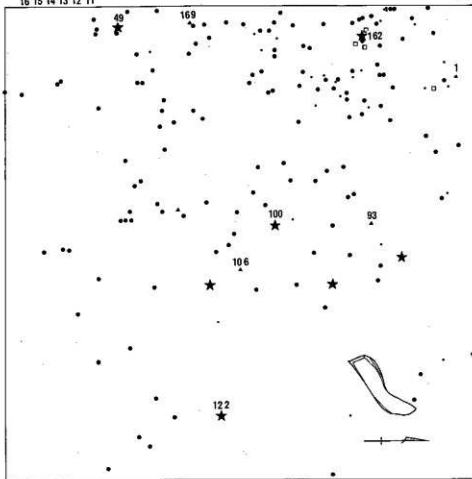
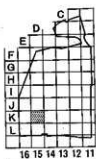


图41 K-14区遺物分布图 (1:40) (1:4)



— 324.80

— 324.10

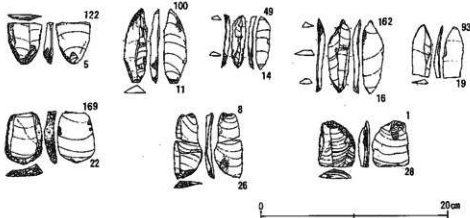


图42 K-15区遗物分布图 (1:40) (1:4)

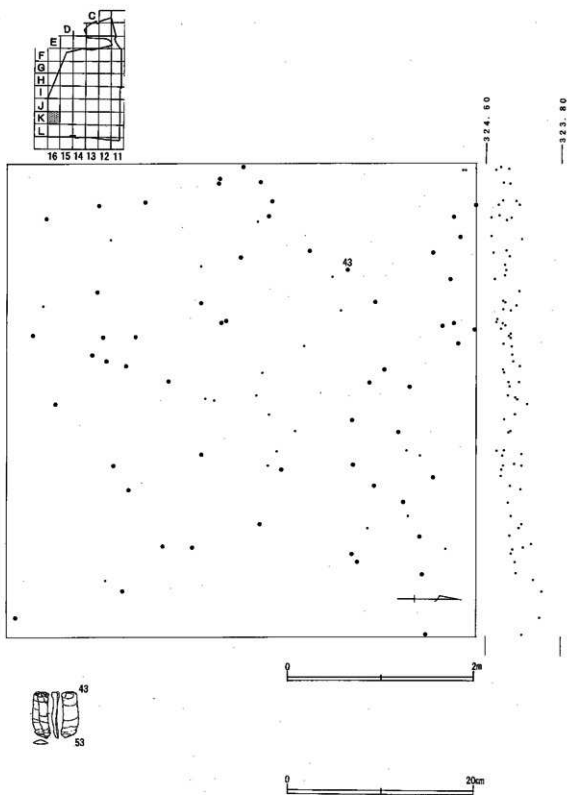


图43 K-16区遗物分布图 (1:40) (1:4)

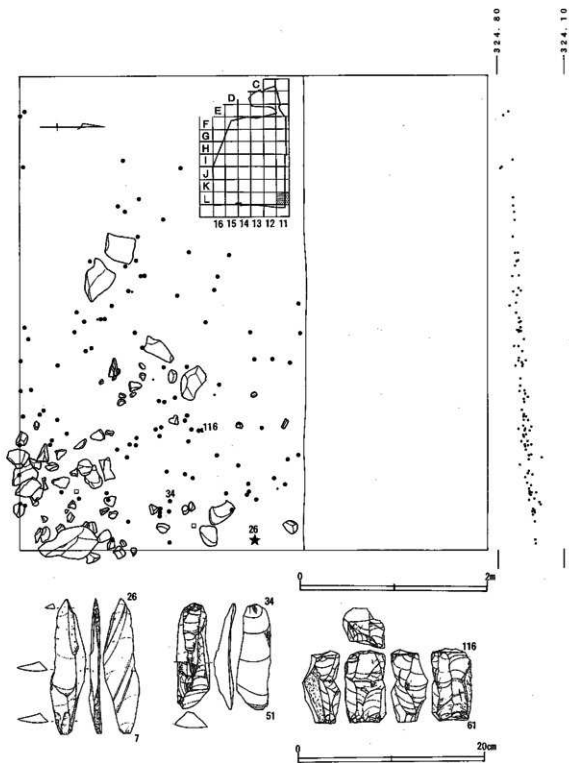


图44 L-11区遗物分布图 (1:40) (1:4)

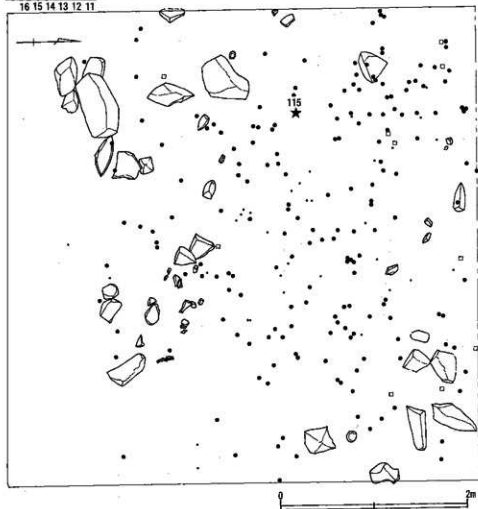
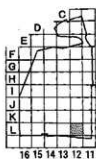


图45 L-12区遗物分布图 (1:40) (1:4)

—323.70

—323.10

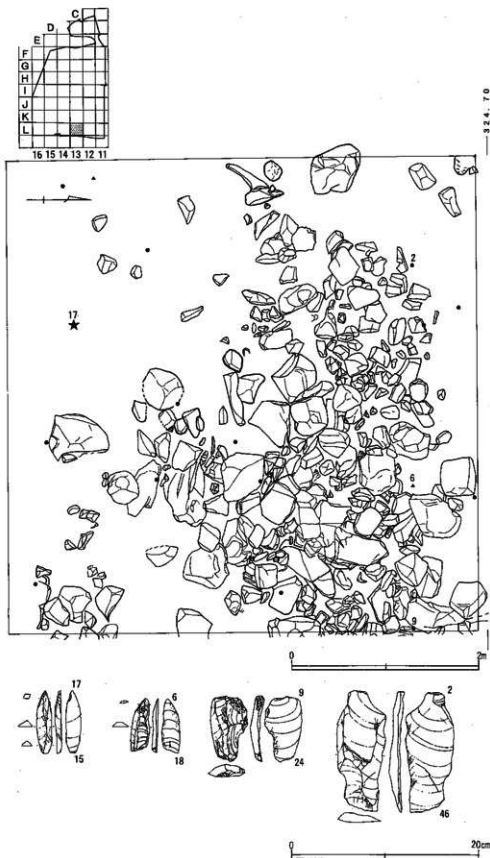


图46 L-13区遗物分布图 (1:40) (1:4)

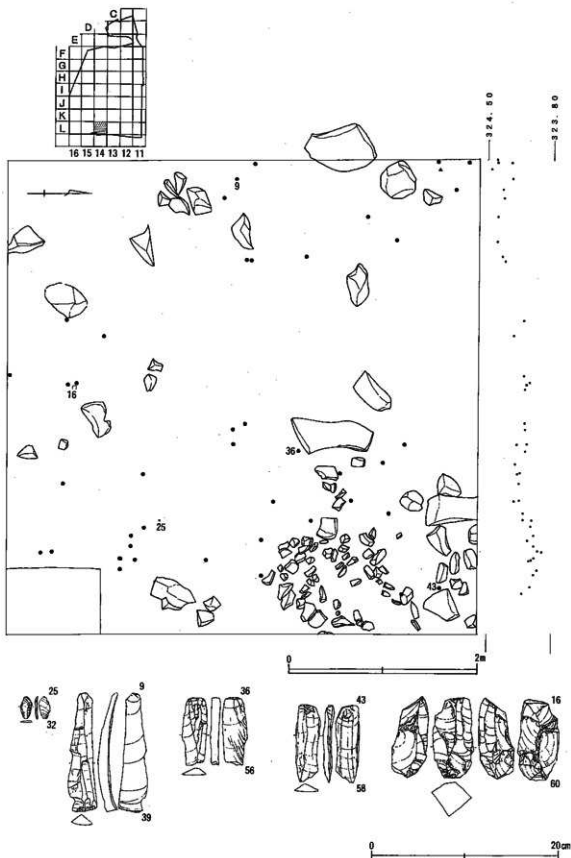


图47 L-14区遗物分布图 (1:40) (1:4)

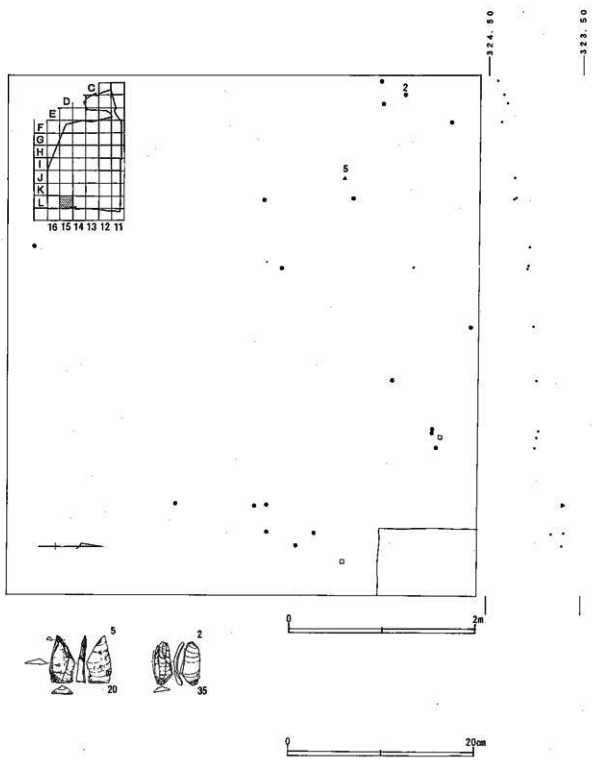


图48 L-15区遗物分布图 (1:40) (1:4)

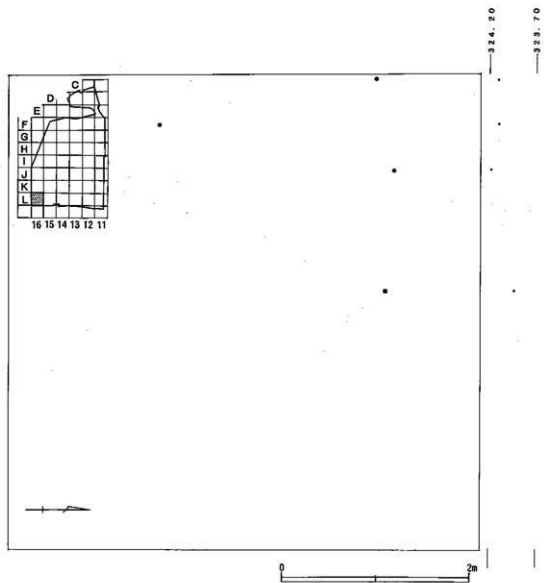


图49 L-16区遺物分布图 (1:40)

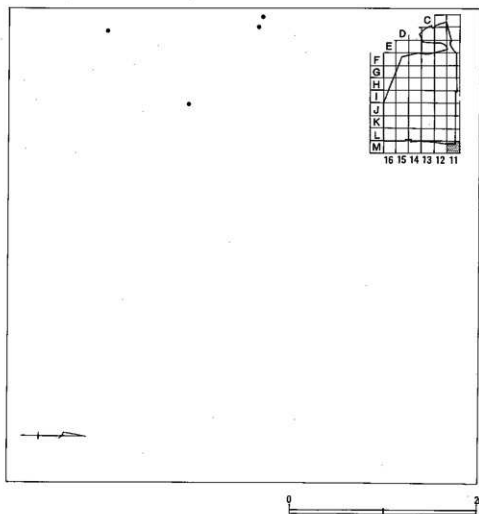


图50 M-11区遺物分布图 (1 : 40)

V 遺 物

1 遺物の種類

発見された遺物は、旧石器時代の石器約1,800点で、種類別にはナイフ形石器・搔器・削器・鏃・使用痕のある剥片・石刃・碎片・石核・ハンマー等がある。総点数は約1,800点、そのうち明確に二次加工が認められるのは約50点である。本報告までにすべての資料整理が完了することが出来ず、本稿ではその一部について報告するものである。

なお、速報等では彫器が存在すると報告したが、その後の整理作業によって太子林遺跡第II地点の石器群では認められないことが明らかとなったのでここに訂正する。

2 遺物各節

1) ナイフ形石器 (図51-1～図53-21)

合計22点出土している(1点は図示できなかった)。中形から大形の石刃を素材とし基部及び先端部に二次加工を施しているものが大半である。

1は全長17.9cmを計る頁岩製の大型品で、基部側周辺部に二次加工を施している。打面及び打窟には二次加工は施されていない。先端部から先端部周辺には使用痕と思われる小剥離痕が数多く認められる。

2は頁岩製で、先端部は鋭い素材のまま未加工で、基部側特に正面左側縁に丁寧な二次加工が施される。先端部左側縁には細かな小剥離痕が認められる。

3はややねじれた玉髓製の石刃を素材とし、先端部及び基部離雄変に二次加工が施されている。

4及び5は中位から基部側のみのナイフ形石器であるが、基部周辺に細かな二次加工が施される。いずれも頁岩製である。

6は正面側に表皮が残されている。7は唯一の安山岩製で、全長14.4cmと大型品である。基部側周辺と先端部右側縁を斜めに二次加工を施して鋭い先端部に仕上げている。

8及び9は中形の石刃を素材としたナイフ形石器で、いずれも玉髓製である。8は先端部が破損しており、本来は9例と同様に尖頭状に仕上げられていたものと推定される。

10は二次加工が浅く、ブランディングと言えるかどうか曖昧でありあるいは鏃とした方が相応しいのかもしれないが、基部側周辺に加工があり、ここではナイフ形石器として報告する。石材は頁岩である。

11は頁岩製で基部側周辺及び先端部左側縁に二次加工を施して、尖頭状に仕上げている。基部は打面及び打窟が加工によって失われている。

12も頁岩製で、基部周辺並びに先端部に二次加工が施される。基部は破損によりわずかに欠失している。

13はやや黒色の頁岩製である。基部周辺及び先端部に二次加工が施されるが、先端部の加工は微細である。

14は玉髓製で、全長5.6cmの中形品である。

15は一般に下呂石と呼ばれているもので、本遺跡では唯一出土している。先端部は第一次剥離面の基部側を加工し、両側縁を急斜な二次加工で鋭い尖頭部に仕上げている。基部周辺にも加工が施されているが、一部欠失している。

16は基部と先端部で迷ったが、縦断面の形態から図のように掲載した。頁岩製である。

17は安山岩製である。先端部右前方よりファシットが入っている。基部側打瘤は取り除かれ、周辺に丁寧な二次加工が施される。

18・19はブランディングが微細であるがナイフ形石器に含めた。18は黒曜石、19は頁岩である。

20は黒曜石製で、急斜に切断して尖頭部を作り出している。

21は、白色の玉髄製で、右側縁全周にブランディングが施される。一見形状からは国府型ナイフ形石器に似ている。

なお、図55-32は加工技術からナイフ形石器と考えているが、小型品としては1点のみであることから、ここでは留保しておく。

2) 搔器 (図54-21~27)

22は基部側を欠失するが、優美なエンド・スクレイパーである。頁岩製で、一部に表皮を残すがほぼ全周にわたり加工が施される。

23は黒曜石製。基部側を欠くが22と同様に優美なエンド・スクレイパーである。

24は頁岩の複刃搔器である。

25は黒曜石製のエンド・スクレイパーであるが、刃部以外を欠いている。

26は頁岩製で、刃部は鋭く加工がなされ、一般的なエンド・スクレイパーと様相が異なる。本例は基部側と刃部側で二つに破損しており、かなり離れて接合している。

27は玉髄製である。先端部にわずかに加工してあるのみで搔器としてよいか躊躇したが、本稿では搔器に含めた。

3) 削器 (図54-28~31)

28は黒曜石製。下端部を欠くが、縁辺に二次加工が認められ、ブランディング加工とも異なることから削器とした。

29は剥片の基部側二次加工を施している。先端部には明確な加工がなされていないが、裏面には使用によるものと思われる小剥離痕が認められる。

30は黒曜石製で、縦位に半割されスポール片のように見られる。先端部に細かな加工が施されている。

31も黒曜石製で、湾曲した剥片を用いて、先端部側縁に加工が施されている。

4) 錐 (図55-33)

黒曜石製の石刃の側縁にノッチ状の加工を施して錐状としたもので、両端から明確に加工は施されていないものの、使用痕と思われる剥離痕もあり、ドリルの機能として用いられたものであろう。

5) 小剥離痕のある石刃・剥片、剥片 (図55-34~図58-58)

本調査によって、石刃あるいは剥片に明らかに使用によってつけられたと思われる石器が多く出土した。これらの石器は「小剥離痕のある石器」として呼称してきている。今回も何点か出土しており、黒曜石が最も多い。また、剥片類は全体の9割以上が安山岩で占められており、今回示した製品類や剥片類をみると玉髄や頁岩・黒曜石が主体の石器群と捉えられる怖れがあるが、製品類と剥片類では石材の占める割合はまったく異なる。

34~37は黒曜石の剥片に小剥離痕が認められるもので、36は石核残り剥片であろう。38~40・42・46・48・49・51・52は頁岩製である。39は石核の上端から下端部まで剥離された石刃で、全長12.7cmを計る。

41は黒曜石製、43～45・47・50・52は玉髓製である。54～58は安山岩製であり、こうした整った同石材の石刃が多く出土している。長さは10cm前後が最も多い。

6) 石 核 (図59・60)

今回の調査によって出土した石核は合計22点である。石材別では、安山岩14点、頁岩4点、玉髓2点、チャート2点である。本稿では時間的な都合によりその一部のみの掲載である。

59・60は頁岩製、61は玉髓、62は安山岩の石核である。

7) 石製品 (図61)

石製品もすべてを掲載できなかった。63～65はハンマーである。63・64は砂岩で明確な使用痕は認められない。65はチャート製で、先端部に叩打痕が認められる。

66は磨石ではないかと思われる。

以上、掲載し得た66点の石器について簡単に触れてきた。本遺跡の全体像についてまだ不足しており、今後とも全資料の公開について努力していきたい。

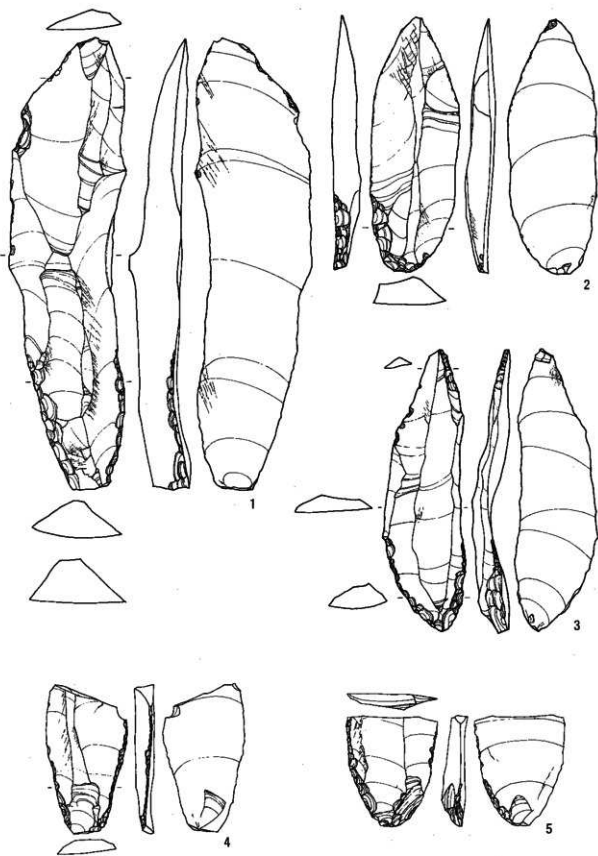


图51 遗物实测图(1) (2 : 3)

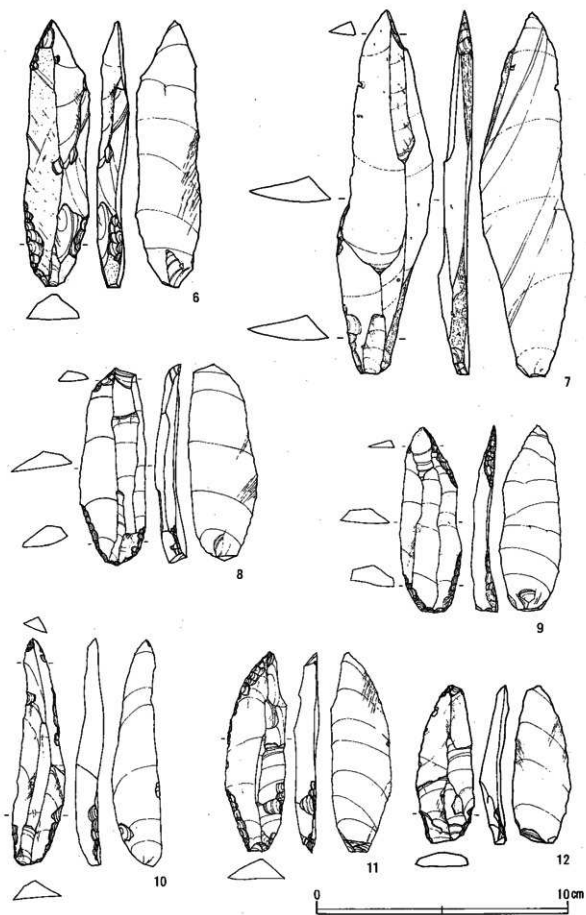


图52 遗物实测图(2) (2:3)

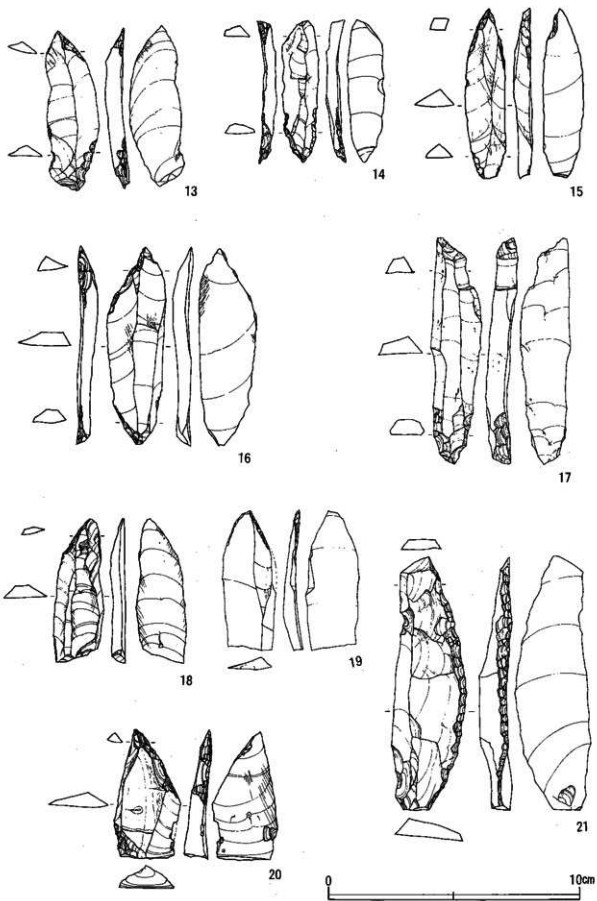


图53 遗物实测图(3) (2 : 3)

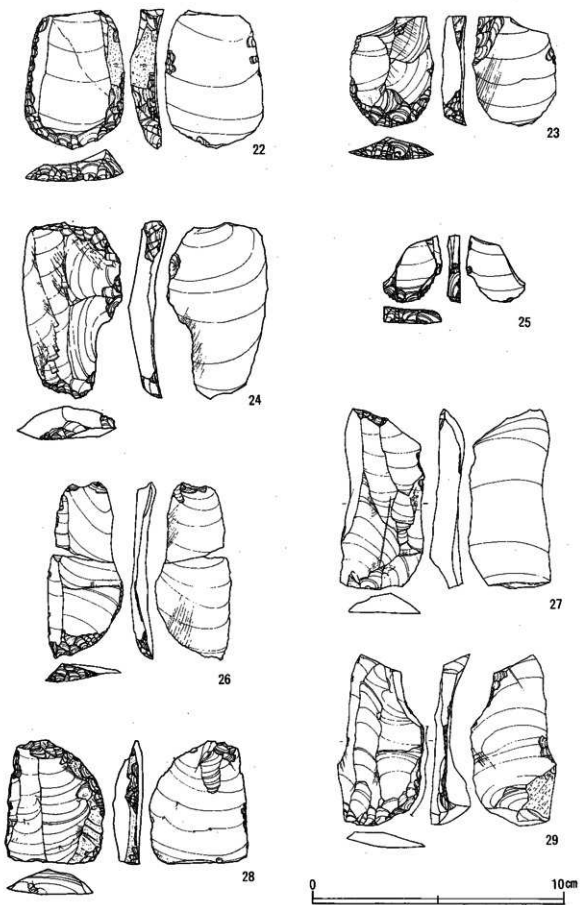


图54 遗物实测图(4) (2 : 3)

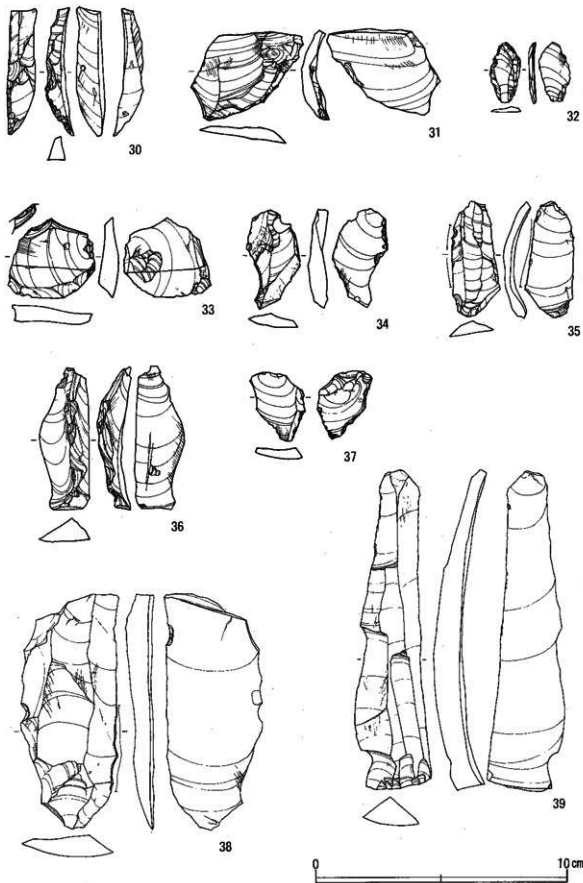
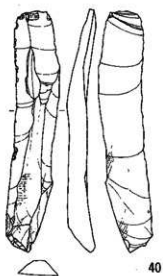
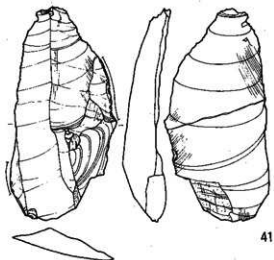


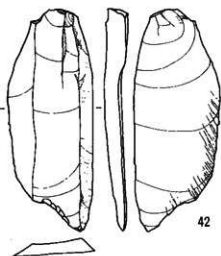
图55 遗物实测图(6) (2:3)



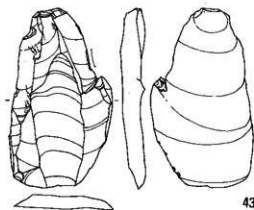
40



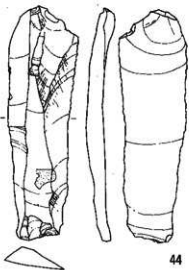
41



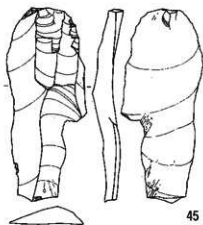
42



43



44



45

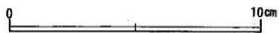


图56 遺物実測図(6) (2 : 3)

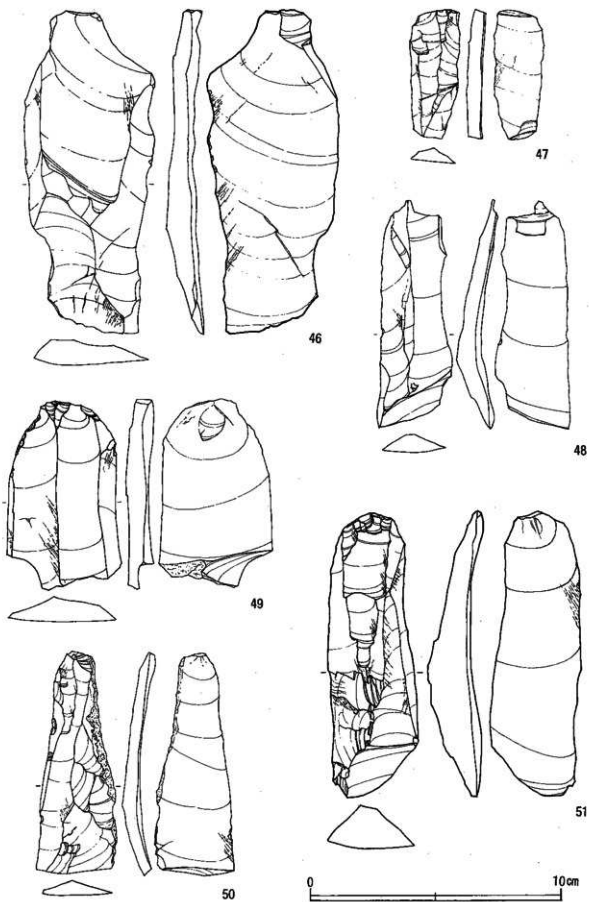


图57 遗物实例图(7) (2:3)

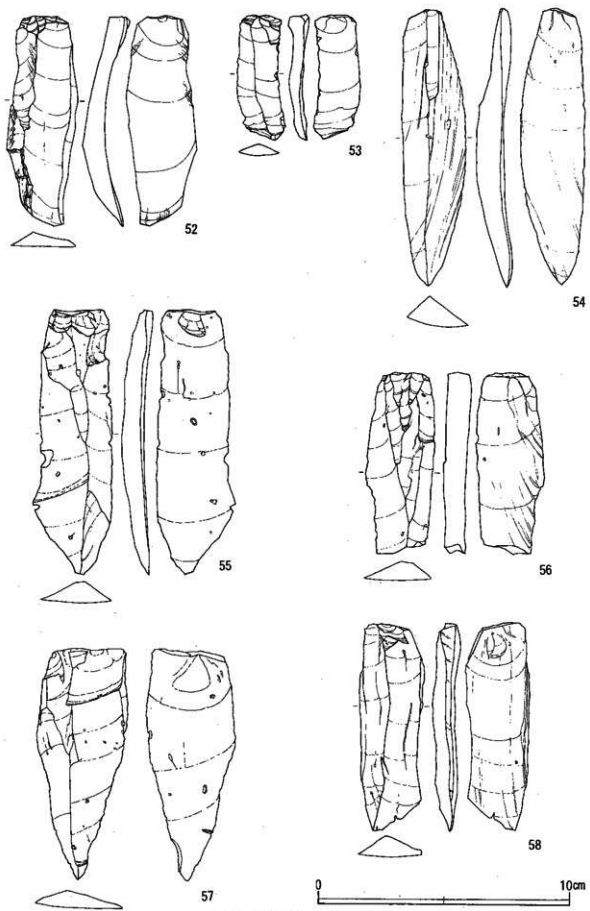
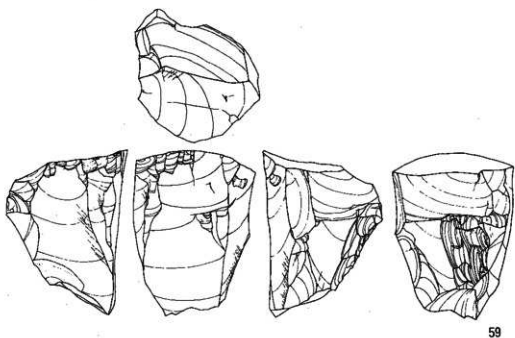
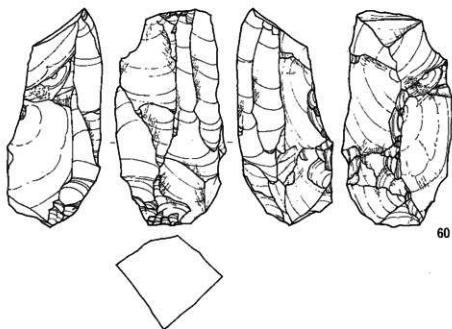


图58 遗物实测图(8) (2:3)



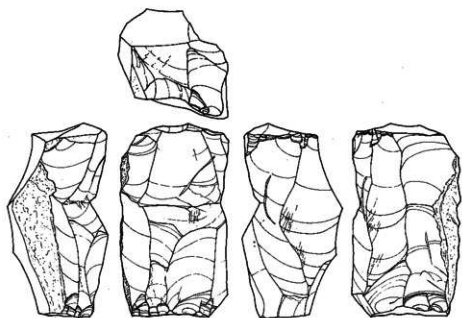
59



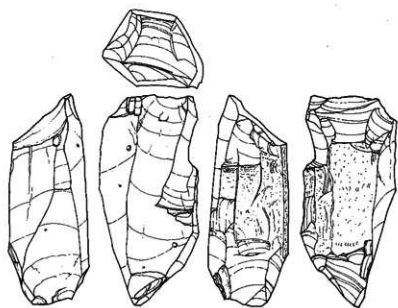
60



圖59 遺物実測圖(9) (2 : 3)



61



62

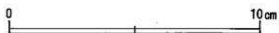
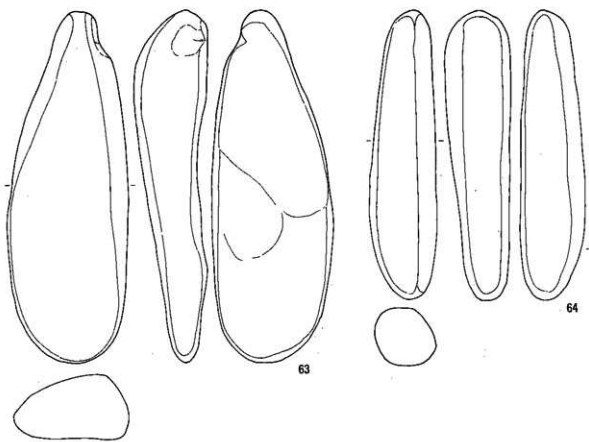
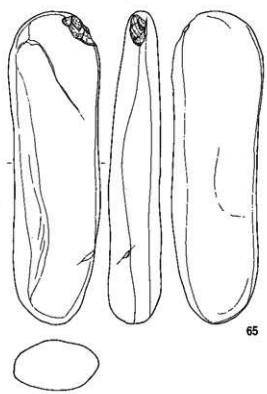
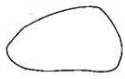


图60 遗物实测图(2:3)

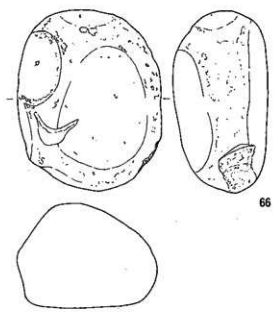


63

64



65



66



图61 遗物实测图(1:2)

VI 飯山市太子林遺跡第II地点の地形と地質

早津賢二・小島正巳

1 はじめに

太子林遺跡第II地点の発掘終了後の、1999年3月に、発掘担当者である望月静雄氏の立ち会いのもと、遺跡とその周辺の地形・地質学的調査をおこなった。また、始良Tn火山灰層と旧石器群との層位関係を解明する目的で、旧石器群の出土層準付近のテフラ分析をおこなった。本稿では、それらの結果について報告する。

2 地形

飯山盆地の千曲川流域には、大小の丘陵状の地形がいくつか認められる。太子林遺跡第II地点は、千曲川右岸にそって延びる一つの丘陵の尾根の南端部、標高320~330mの地点に位置する。千曲川河床との比高は、20~30mである。丘陵の東西断面は、馬の背状を呈するが、左右非対称で、西に緩やかで東に急傾斜をなす。丘陵の東縁部には、重地原断層が走る(井上 1962, 活断層研究会編 1991, 赤羽・清水 1991)(図62)。重地原断層は、NS走行で西上がりの活断層(逆断層)で、確実度IIに分類されている(活断層研究会編, 1991)、丘陵の東側への急傾斜は、断層上盤の撓曲変形と考えると説明しやすい。

この断層の活動年代については、不明の点が多い。ところで、約5km下流の千曲川左岸にある東原遺跡では、3,000~3,500年前の縄文時代後期中葉(加曾利B併行期)に、断層運動を被ったことが判明している(早津ほか 1999)が、このとき活動した断層は、重地原断層の北への延長部にあたる可能性が大きい。遺跡の東方地域は、毛無山(1,649.8m)に連なる山地となっているが、小菅集落東方の山地には、幅約750mの西に開いた馬蹄形の崩壊凹地が認められ、西地の底から四方に扇状地状の地形が発達する(図62)。

3 地質

発掘地点の地質は、上位より、I層~VII層に区別できる(図63)。I層とII層は、色調などに若干の違いはあるが、ともに黒土層で、層厚は合わせて40~50cmである。III層は、暗黄色を呈する漸移層で、層厚は約10cmである。IV層は、黄褐色のローム層で、層厚は平均約20cmであるが、下位のV層の割れ目を埋めている部分では、40~50cmに達することもある。旧石器の包含層となっている。

V層は、褐色ローム質のシルト~粘土層で、スコリア質の細粒岩片が散点する。層厚は約50~60cmである。通常のローム層に比べて、非常に固くしまっている。上面には、乾裂(乾痕、sun crack)とみられる不規則な多角形~亀甲状(平面形)の割れ目が発達し、間を上位のローム層(IV層)が埋めている。割れ目は、クサビ状に深さ最大60cmにも達する。このように、V層は、固くしまり、しかも乾裂が発達することからみて、冠水した後に干上がるような状態に置かれたことがあったものと推察される。

V層上面の乾裂と類似の乾裂は、対岸の上野遺跡(図62)の発掘グリットでも認められた(早津・小島 1990)。上野遺跡の乾裂は、始良Tn火山灰の降下層準直下にあることが報告されているが、本地点の乾裂も、後述のように、始良Tn火山灰の降下層準直下であり、両地点の乾裂は、お互いにきわめて近い層準にあることになる。お互いに接近した地点にあり、標高も類似していることを併せ考えると、両者は同じ時期のものである可能性が大きい。

VI層は、安山岩質の溶岩・火砕岩の岩片を主体とする崩壊堆積物で、層厚は4mである。赤羽・清水(1991)

の内野土石流堆積物に対応すると思われるが、均質な基地の中に、特定の岩石の岩片だけからなるブロックが散在していることから、土石流や泥流の堆積物ではなく、岩層なだれの堆積物である。周辺の地形からみて、給源は、小菅集落東方の崩壊凹地であると考えられる。VI層に接してその下位には、千曲川の河床堆積物であるVII層が位置し、両者の間には、土壌層などの時間間隙を示す証拠は認められない。したがって、VI層の岩層なだれは、千曲川に流れ込んで堆積したものと考えられる。V層の褐色ローム質シルト～粘土層は、岩層なだれの堆積後に、水中に一時的に懸濁していた岩層なだれ起源の細粒物質などが堆積したものかもしれない。

VII層は、水底の堆積で、上部の細礫混じりの砂層（1 m）と下部の粘土・シルト層（下限不明で2 m以上）からなる。

4 旧石器群の出土層準

旧石器と始良Tn火山灰層（AT，町田・新井 1992）との層位関係を明らかにする目的で、テフラ分析をおこなった。分析は、IV層を垂直に10cm幅で連続採取した3点の試料とV層からの1点の試料についてなされた（図63）。採取した4点の試料を自然乾燥させ、それぞれ20gに水を加えて、ミキサーで十分攪拌

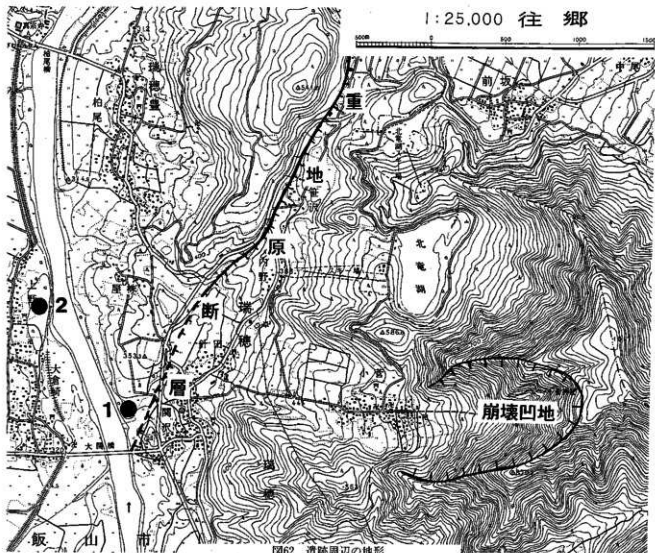


図62 遺跡周辺の地形

1：太子林遺跡第II地点、2：上野遺跡
 (国土地理院発行2万5,000分の1地形図「往郷」を使用)

し、粘土分を流し去った後、超音波洗浄機で約20分間洗浄した。それらを自然乾燥させた後、実体顕微鏡下で火山ガラスの相対的量比の測定をおこなった。本地域を含む妙高火山群テフラ地域のテフラについては、すでに鉱物・ガラスの屈折率を含む詳細な岩石記載がなされており、調査地域のこの付近の層準に認められるAT型火山ガラスは、ATであることがすでに判明している（早津・新井 1985、早津ほか 1983など）ので、屈折率の測定などは、今回はおこなわなかった。

分析の結果、IV層の3試料中から、いずれも無色透明でパール型のAT火山ガラスが多く検出され、とくにIV層下半部の試料中から最も多量に検出された（図63）。V層の割れ目に落ち込んでいる部分の試料中にも、ATガラスが認められるが、上位の部分より量的に少ない。V層の試料からは、ほとんど検出できなかった。

V層の割れ目は乾裂と考えられ、IV層の堆積前にすでに形成されていたと考えられる。したがって、IV層の初期の堆積物は、まずV層の割れ目を埋めていったはずである。この部分にATガラスが少ないということは、ATの降下層準はより上位にあるということを示している。このことと、IV層の下半部の試料中に、ATガラスが最も濃集しているということを含ませ考えると、ATの降下層準は、IV層の下半部のどこかにあるが、下部部ではなく、V層の割れ目を完全に埋積した以降（おそらく直後）であるということになる。

ところで、発掘担当者によると、旧石器群およびそれに伴う礫群が最も多く包含されていた層準は、IV層の真ん中の層準よりやや下方の層準であった。今回の調査時点では、すでに発掘グリッドは完全に消滅していたため、旧石器群とAT降下層準との関係を正確に決定することは困難であるが、上記の事実から考えて、旧石器の層準がAT降下後であることは、まず間違いないと思われる。

なお、V層の割れ目に落ち込んだ形で出土した旧石器も、少なからず認められている。あるものは、割れ目の深部にまで達している。旧石器人がこの地に生活していた時には、V層の割れ目は完全に埋積されており、その上をIV層の一部が覆っていたはずである。地表にある旧石器が地下にある割れ目の深部に落ち込むことは、通常の状態では考えにくい。地層中に埋もれてからも、同様である。旧石器人が生活している間ないしそれ以降のIV層堆積中に、遺跡に接して走っている重地原断層が活動し、強い地震動により、地表下にあったV層の割れ目が開き、上を覆っていたIV層が割れ目に落ち込んだとは考えられないだろう。重地原断層の活動履歴とも関係して、興味を持たれる。

引用文献

- 赤羽貞幸・清水岩夫（1991）：飯山地域の地質図。飯山市誌編纂専門委員会編『飯山市誌自然環境編』,741P；付図。
早津賢二・新井房夫（1985）：妙高火山群テフラ地域のテフラ層。早津賢二著『妙高火群—その地質と活動史—』,第一法規出版,344P,253-305。
早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月静雄（1983）：信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラ層との層位関係。信濃,35 813-822。
早津賢二・小島正巳（1990）：飯山市上野遺跡の地質—旧石器群の層位と段丘形成年代—国道117号線関係遺跡調査団編 小沼沼端バイパス関係遺跡発掘調査報告書II—上野遺跡・大倉遺跡—,49P,：176-178。
早津賢二・渡辺満久・新井房夫・望月静雄（1999）：飯山盆地北部における縄文時代後期生活面の層位変位。地学雑誌,108,76-84。
井上春雄（1962）：信濃河川系に沿う礫層堆積地形とその意義。信州大学教育学部研究論集,13,89-100。
活断層研究会編（1991）：新編日本の活断層—分布図と資料—。東京大学出版会,437P。
町田 洋・新井房夫（1992）：火山灰アトラス—日本列島とその周辺。東京大学出版会,276P。

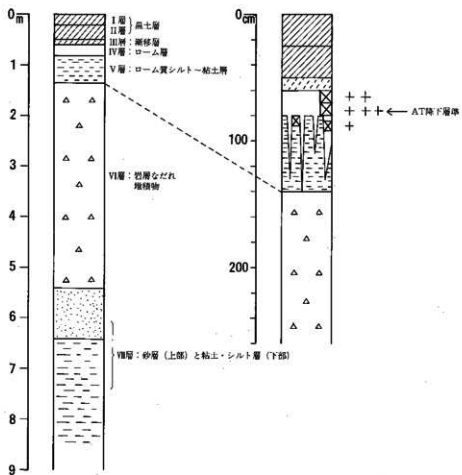


図63 遺跡付近の地質柱状図

☒はテフラ分析をおこなった層準
+印はATガラスの量比 (++++>++++)

VII 終わりに

平成10年度の夏以降、不順な天候により発掘調査の日程は大幅に遅れることとなった。9月から10月の中旬まで雨天や台風の影響などで一日中晴天という日はほとんどなかった。また、本発掘調査で、V層を調査する事となったが、非常に硬くしまった土層で移植ゴテで掘れない状態であった。そのようないくつかの事由が重なり、当初予定していた10月中旬調査完了の日程が遅延する結果となった。

整理作業についても、他の遺跡発掘調査報告が2件あり、単年度事業ゆえ十分な整理作業を行い、調査報告書を作成することが出来なかった。今後さらに整理作業を行い、責を果たしたいと考えている。

さて、今回の調査によって発見された旧石器時代石器群は、大型のナイフ形石器や・搔器などを組成とし、石刃石核の存在から石刃技法に基づく石器群であることは明らかである。また、10cmを上回る石刃やナイフ形石器の存在は、かなり完成された石刃石器群だと思われる。ナイフ形石器については、打面や基部そのものを切断や折り取ることをせずに、形状や基部周辺の調整にとどめている点などから東山型ナイフ形石器の範疇に入るものと思われる。また、石材でも、地元産の安山岩を主要石材とするものの、玉髄や頁岩を多用していることもそうした東北地方の石器群に類似する。

昭和55年調査された太子林遺跡石器群との関係は、現在のところ若干の年代差があるのではないかと考えている。太子林遺跡石器群は、局部磨製石斧を伴い、これにナイフ形石器や鏃がある。搔器には典型的なエンド・スクレイパーは存在していない。石核も石刃石核であるが、定型的な石刃の作出は数少ない。これに対し太子林遺跡第Ⅱ地点は、局部磨製石斧を伴わず完成度の高い典型的な石刃石核をもち、定型的な石刃を規格的に作出しており、より発展した石刃石器群と捉えることが出来る。

太子林遺跡はAT降下層準の年代と考えており、したがって今回の太子林遺跡第Ⅱ地点はそれよりも若干新しい石器群と位置付けることが出来る。

今回の整理の中で、接合作業も試みているがかなり接合されている。こうした作業の中でより明確に石器製作工程を明らかに出来るものと思われるし、石器群の内容についても、今後の作業で明らかにしたいと考えている。

最後に、発掘調査にかかわられた作業員の皆さんをはじめ関係者のご協力で厚く感謝申し上げます。

写真図版



遺跡遠景（東方小菅地区より）



調査地区遠景（北方黒穂グラウンドより）



調査地区近景 (東方関沢バイパスより)



調査地区近景



調査地区表土除去



地質調査（工事施工後）



層 序



作業風景（東より）



第 5 群遺物出土状況



第 4 群遺物出土状況



平地 (G・H・I) の調査状況



第1号破群



玉髓製石核00出土状況



安山岩製石核(第5群)出土状況



大形ナイフ形石器(1)出土状況



ナイフ形石器(6)出土状況



ナイフ形石器(2)出土状況



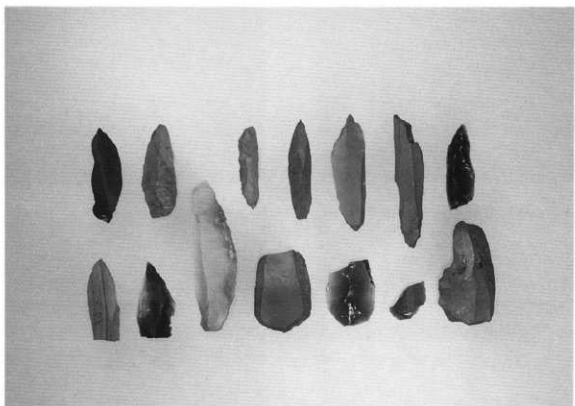
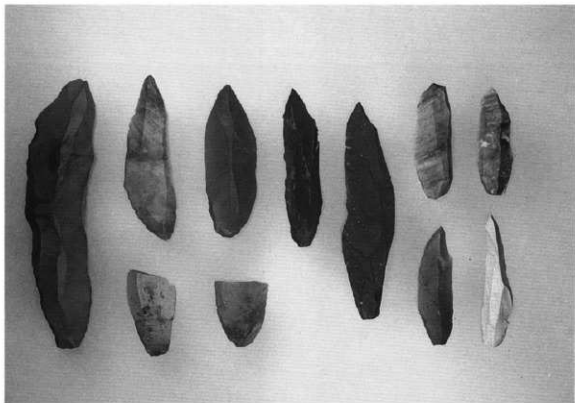
ナイフ形石器00出土状況



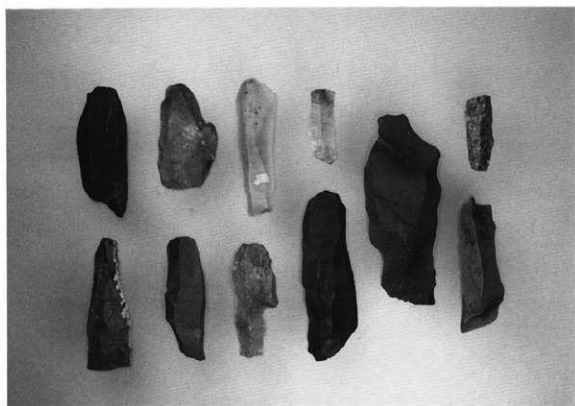
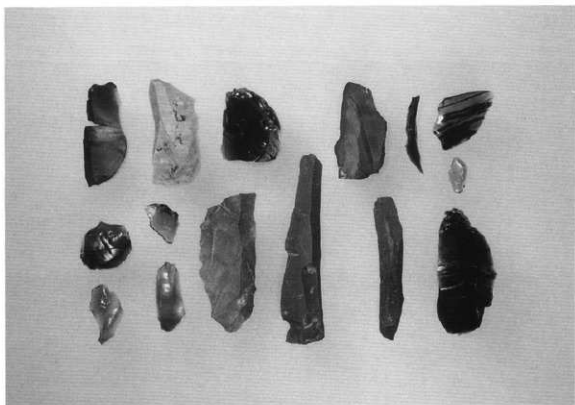
ナイフ形石器(3)出土状況



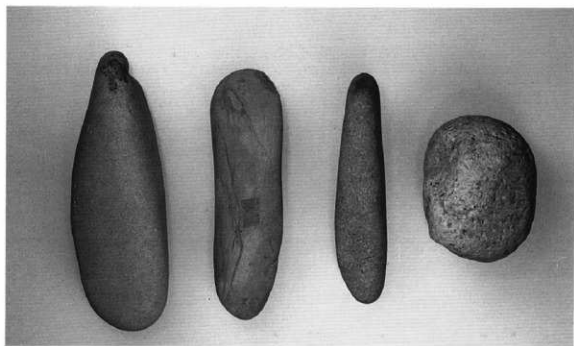
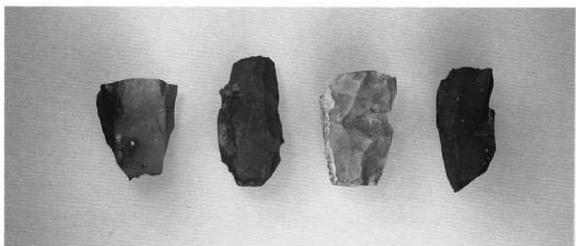
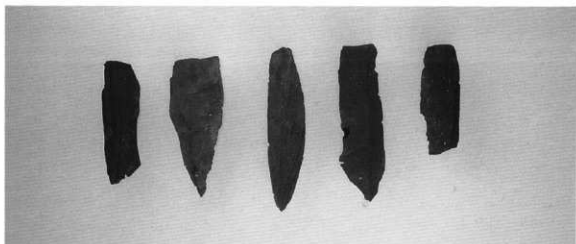
ナイフ形石器000出土状況



出土旧石器(1)ナイフ形石器ほか



出土石器(2)削器ほか



出土旧石器(3)石刃・石核・ハンマー

飯山市埋蔵文化財調査報告 第60集

太子林遺跡第Ⅱ地点
—概要報告書—

平成11年3月15日発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会

編集者 太子林遺跡調査団
(団長 高橋 桂)

印刷所 長野市柳原2133-5
ほおずき書籍館

